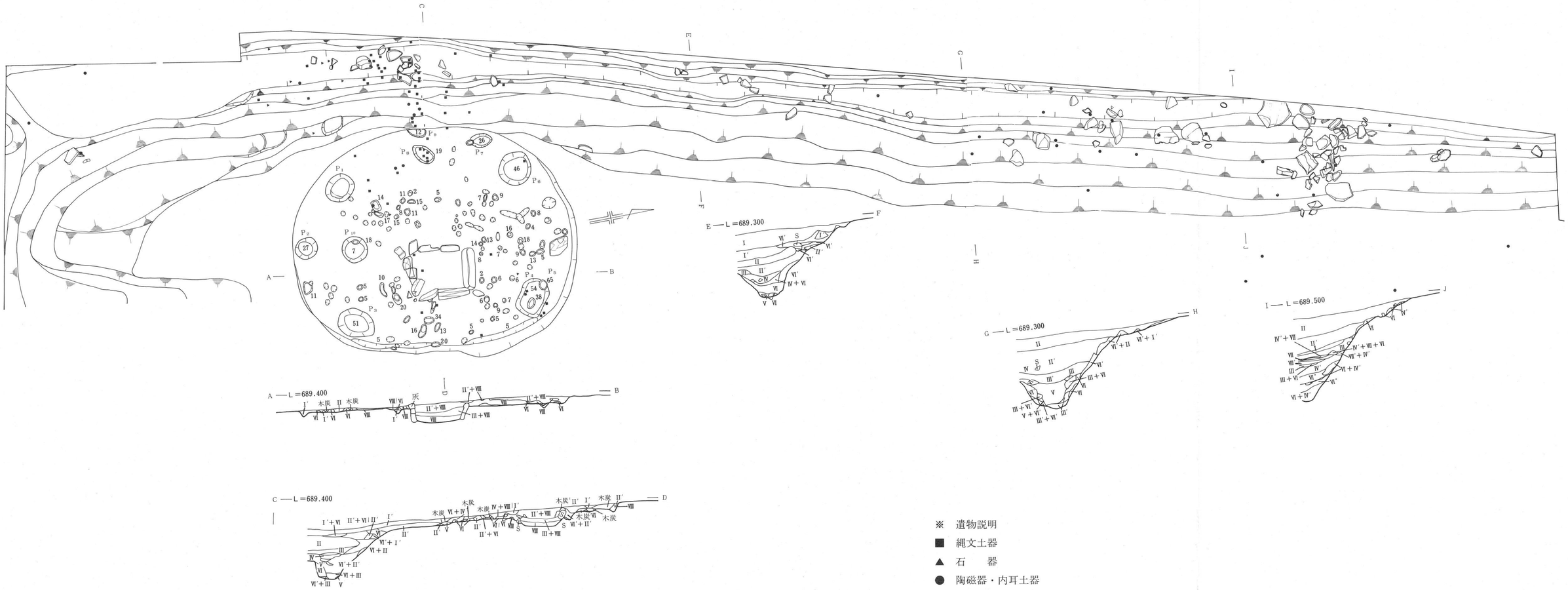


第４図　青木城遺跡Ｄ地区第Ⅰ号住居跡、横堀実測図（Ｓ＝$\frac{1}{60}$）

は10cmと浅い。断面はタライ状をなし、底部に2重の底と2本の小穴をもつ。小穴は周辺との柱穴址群との関係から時期が下がるものと考えられる。底は割合柔らかい。

遺物　第8図1が覆土下層より出土している。縦の懸垂沈線と結節縄文を施す。縄文中期後半に位置付けられる。

土壙7号　本跡は調査区の北域中央から検出された。直径1m55cmの円形をなし、深さは70cmで、断面は鍋底形をしている。掘り込み、底部面とも堅く整っている。覆土状態は比較的ノーマルで、VI層（ローム漸移層）5～15cm、III層（暗茶褐色土）15～20cm、IV及びVI層（黒褐色土）15cm前後、III層10～18cm、（暗褐色土）15～20cmで、中央に木根の腐植層が入り込んでいる。

遺物　土壙内中層のIII・IV層から主に出土した。第8図2は口縁部片で粘土貼り付けにより口唇部を肥厚する。横走隆帯を口唇部に沿って貼り付けている。渦巻状をなすであろう。3は結節縄文を地文としその上に懸垂隆帯を貼り付け、隆帯両側を棒状施文具でナデているため、地文が消えている。4は太い懸垂沈線と棒状施文具による綾杉文の退化した雨だれ状文が付けられている。5は台付深鉢形土器の台部で完形である。高さ11.5cm、底径12.5cmを測る。長さ6cm、幅2.5cm平均の透しを4単位入れる。脚部文様は透しの縁に隆帯を貼り付け、その中を棒状施文具で雑な綾杉文を施す。4単位の内、1単位の綾杉文は極だって幅が7mm前後と広く、指頭で施している。内外面ともに地はヘラナデである。脚部底はやや内反りしている。総じて縄文中期後半唐草文系III期に位置付けられるが、2はやや古い。

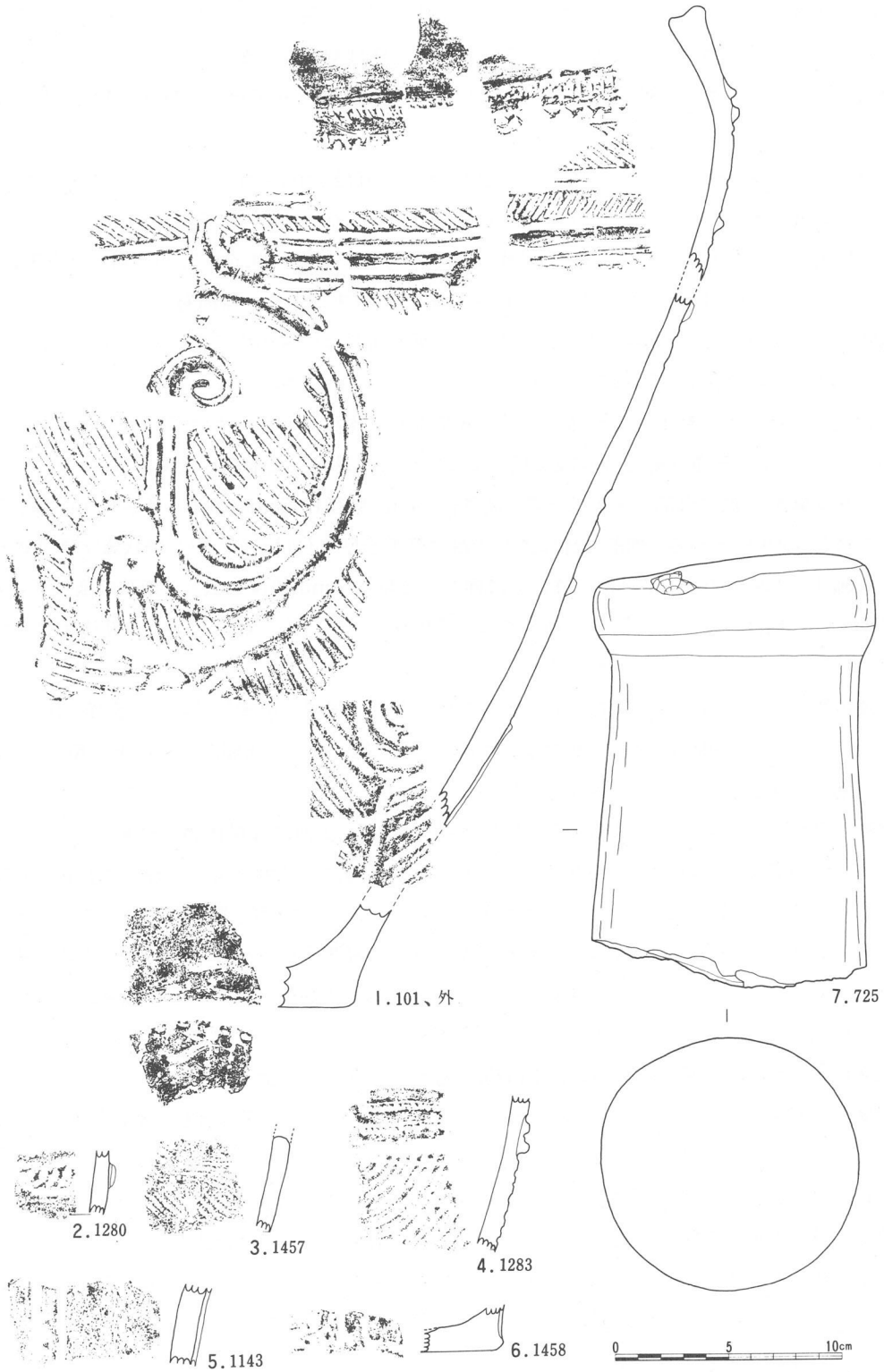
土壙10号　本跡は第2号住床面下より検出され、覆土はIII層が堆積していた。直径1m85cmの円形をなし、深さは80cmを測る。断面は鍋底形をなす。掘り込み、底部面ともに堅く整っている。覆土中層まで第2号住の柱穴が入り込んでいる。

遺物　第8図6は無文の口縁部片で、指ナデをしており、表面には炭化物が付着している。7は隆帯による連続する渦巻状文を貼り付け、内側にヘラ状施文具で刺突文を、外側にLRに斜縄文を施している。内面はていねいなヘラナデをしている。あまり類例を見ないものである。8は口縁部片で、馬締形かS字形をなすと思われる厚くて太い隆帯を貼り付け、その上に内側のみ棒状施文具で刺突文を施す。表面には炭化物が付着している。内面はナデている。類例は少ない。いずれも時期を決定しにくいが、6・7は縄文中期後半、8は中期末に位置付けられる。

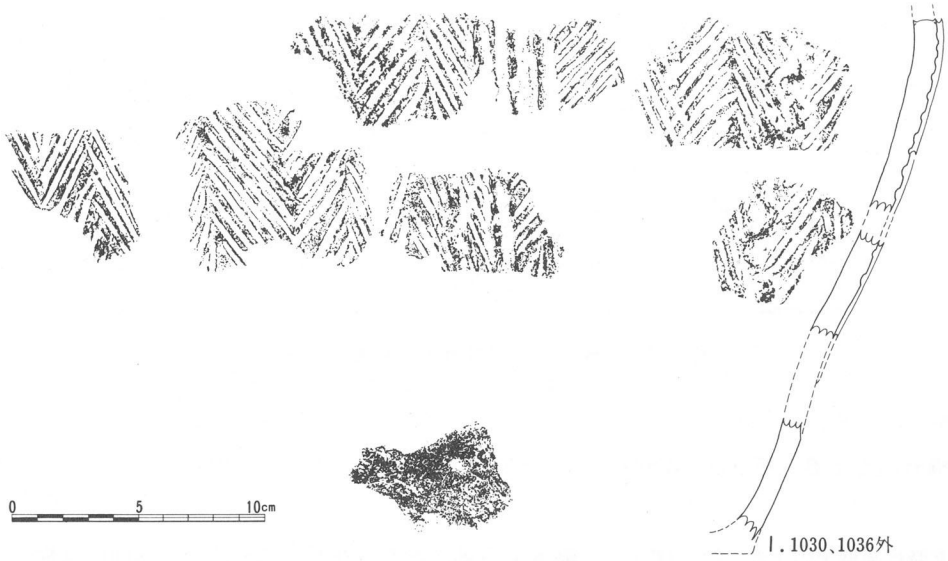
土壙8号　本跡は土壙10号の南側約1m20cm離れて第2号住床面下より検出された。10号と同様、覆土はIII層が堆積していた。直径2m5cmのほぼ円形をなし、深さは20～35cmを測り西側が浅い。底面には3つの小穴があり、その内の1つは第2号住の柱穴が底面下まで掘り込まれている。掘り込みは良好であるが底面はやや柔らかい。断面はタライ状をなす。

遺物　覆土上面より陶器が出土しているが、堆積土層中からは遺物は出土していない。

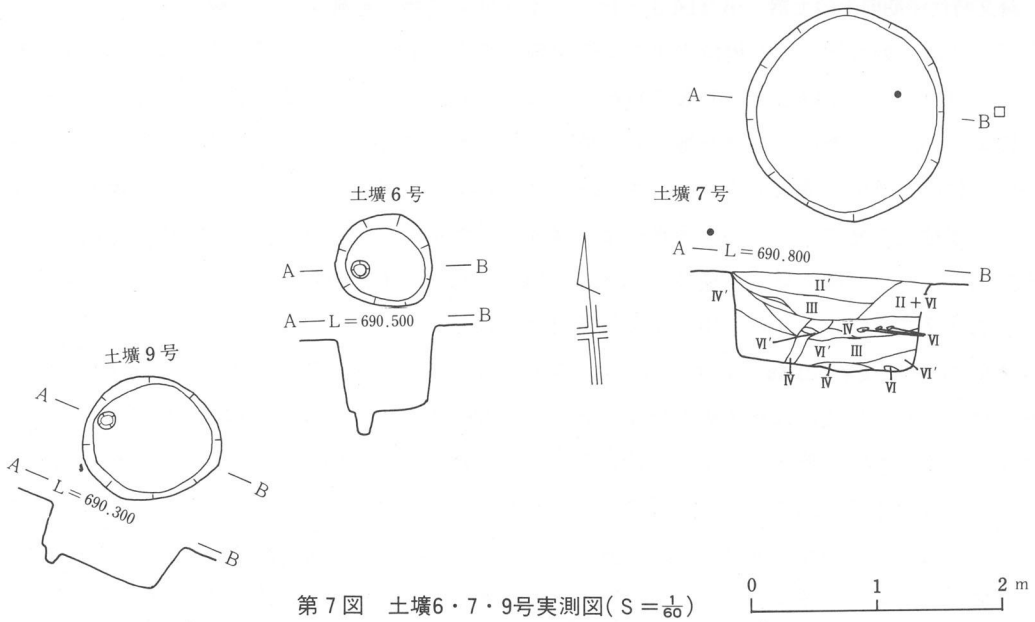
土壙6号　本跡は調査区の北域、土壙7号の南西より検出された。直径75cmの円形をなし深さは65cmを測る。西壁寄底面に直径12cm、深さ15cmの小穴がある。掘り込みは堅いが底面はやや柔らかい。断面は鉢状をしている。



第5図　第1号住出土遺物実測図（S＝$\frac{1}{3}$）



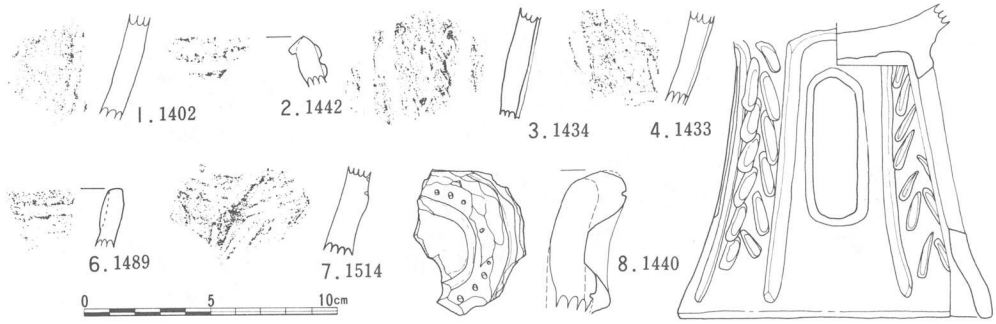
第6図　第I号住居出土土器実測図(S＝$\frac{1}{3}$)



第7図　土壙6・7・9号実測図(S＝$\frac{1}{60}$)

遺物　出土遺物はない。

土壙9号　本跡は土壙6号の南西から検出され、土壙7－6－9号とほぼ一列に並んでいる。直径1m5cmのほぼ円形をなし、深さは東壁で45cm、西壁で35cmを測る。西壁寄底面には、6号同様に小穴があり、直径15cm深さ10cmを測る。掘り込み、底面ともに割合堅くしっかりしている。断面はタライ状をなす。



第8図　土壙3・7・10号出土土器実測図（S＝$\frac{1}{2}$）
（1.土壙3号、2～5土壙7号、6～8土壙10号）

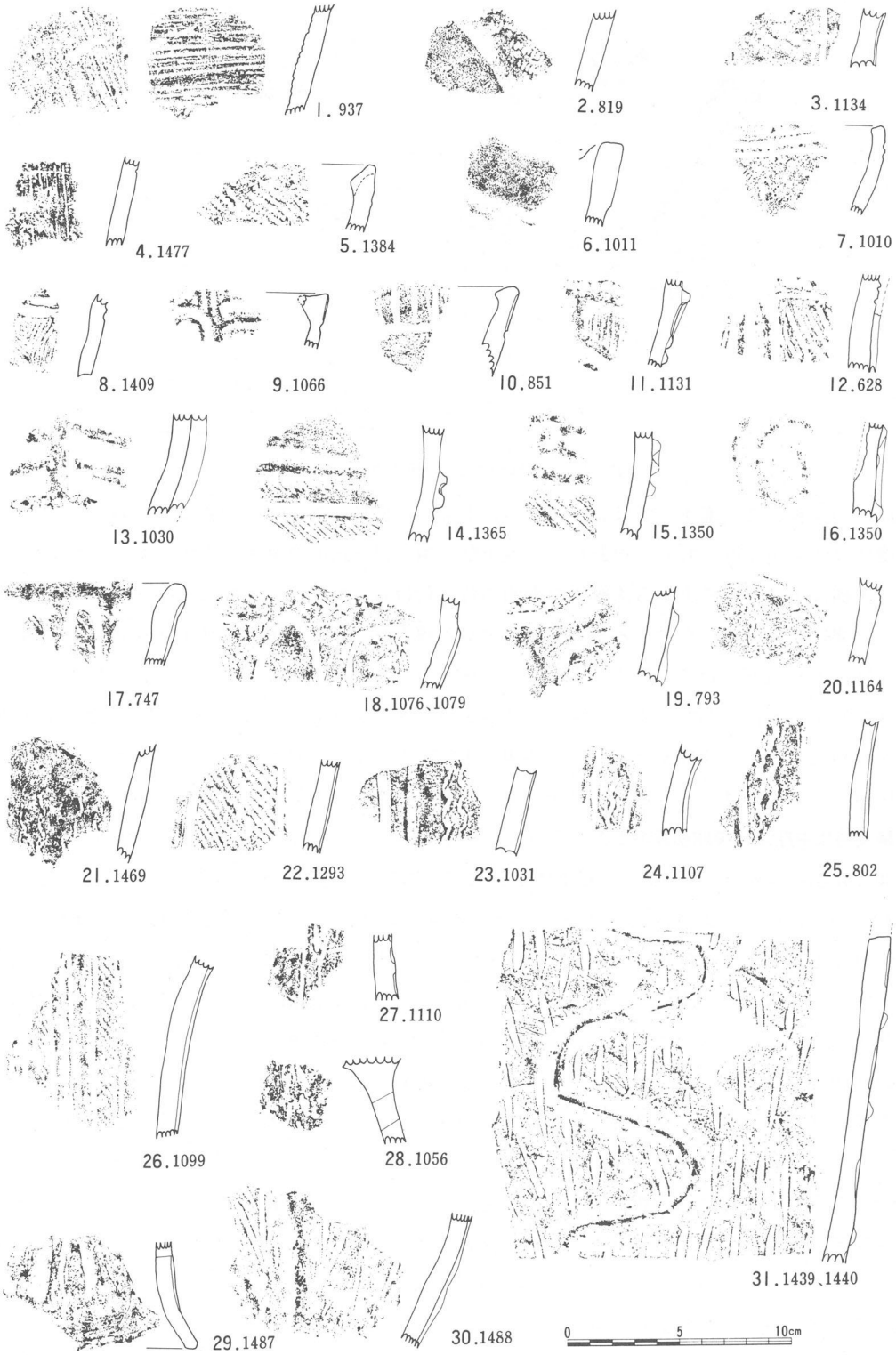
遺物　出土遺物はない。

遺構外出土土器　第9図、第10図がある。調査区全域の覆土下層II～III層内より出土したものである。

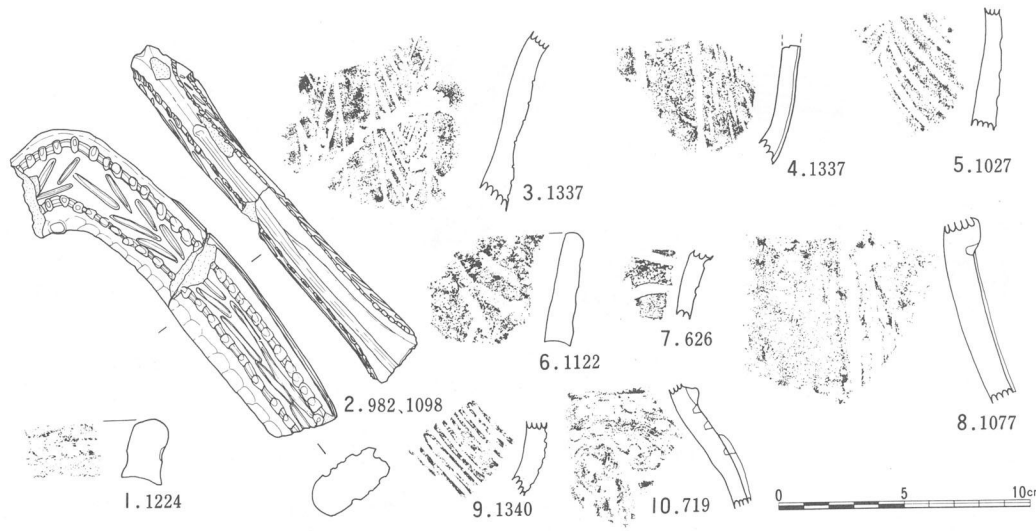
縄文時代早期末の土器（第9図1）　繊維を多量に含み、外面には斜位の、内面には横位の貝殻条痕文を施す。茅山上層式に位置付けられる。

縄文時代中期前半の土器（第9図3～13）　3は地文に無節斜縄文を施し縦の沈線をその上に付ける。4は半截竹管により縦位の平行沈線を施しさらに横位にも付けている。5は口唇部を粘土の貼り付けにより肥厚させ、LRの斜縄文を施す。6は、無文の波状口縁部で肥厚させ口縁部下に段をもつ。7は無節の縄文を地文とし棒状文具で口唇部に沿って2条の沈線を施す。8は隆帯の貼り付けと無節の縄文により構成される。9・10は、棒状施文具により口縁部に渦巻文、縦・横位の沈線文を施す。11・12は隆帯による渦巻文と懸垂文を貼り付け地文に斜条線を施す。11は隆帯上位にヘラ状施文具で連続押し引き文を施す。13は隆帯で肋骨文を施す。4は梨久式系、6は藤内式系、11・12は井戸尻III式系に位置付けられる。

縄文時代中期後半の土器（第9図14～31、第10図1～6）　第9図14・15は横走隆帯と渦巻文が貼り付けられ、地文には斜条線を施す。14は隆帯間にヘラ状施文具で刻み目が付けられる。16は隆帯による渦巻文を施す。唐草文系IIIに位置付けられる。17・19・26は隆帯により楕円状に区画し、その間に単節斜縄文を施し、隆帯際をナデ整形している。18・20・21～25は隆帯及び沈線により楕円状、半楕円状に連結させた区画をし、1条～4条の結節縄文を施す。18は隆帯上位にヘラ状施文具で刺突を施す。いずれも結節部以外を磨り消している。伊那谷中期後半第IV期（唐草文系III、曽利III～IV）に位置付けられる。27～29は台付深鉢形土器の台部破片である。いずれも透し部が見られる。27は棒状施文具で縦の条線を付け、28は逆「ハ」の字文を付けている。29は雑に懸垂隆帯を貼り付けヘラでナデている。脚部は外反する。30は懸垂隆帯を雑に貼り付け、地文には退化した綾杉文を施す。外面に炭化物が付着する。31は器面を指と棒状施文具でナデた上に蛇行隆帯を貼り付け雨垂れ状の条線を施す。内面は指で横ナデしている。外面は炭化物が付着している。第10図1は、土器の部位の判別が難しいが、口縁部片として把握しておく。ヘラ状施



第９図　遺構外出土土器実測図（Ｓ＝$\frac{1}{3}$）



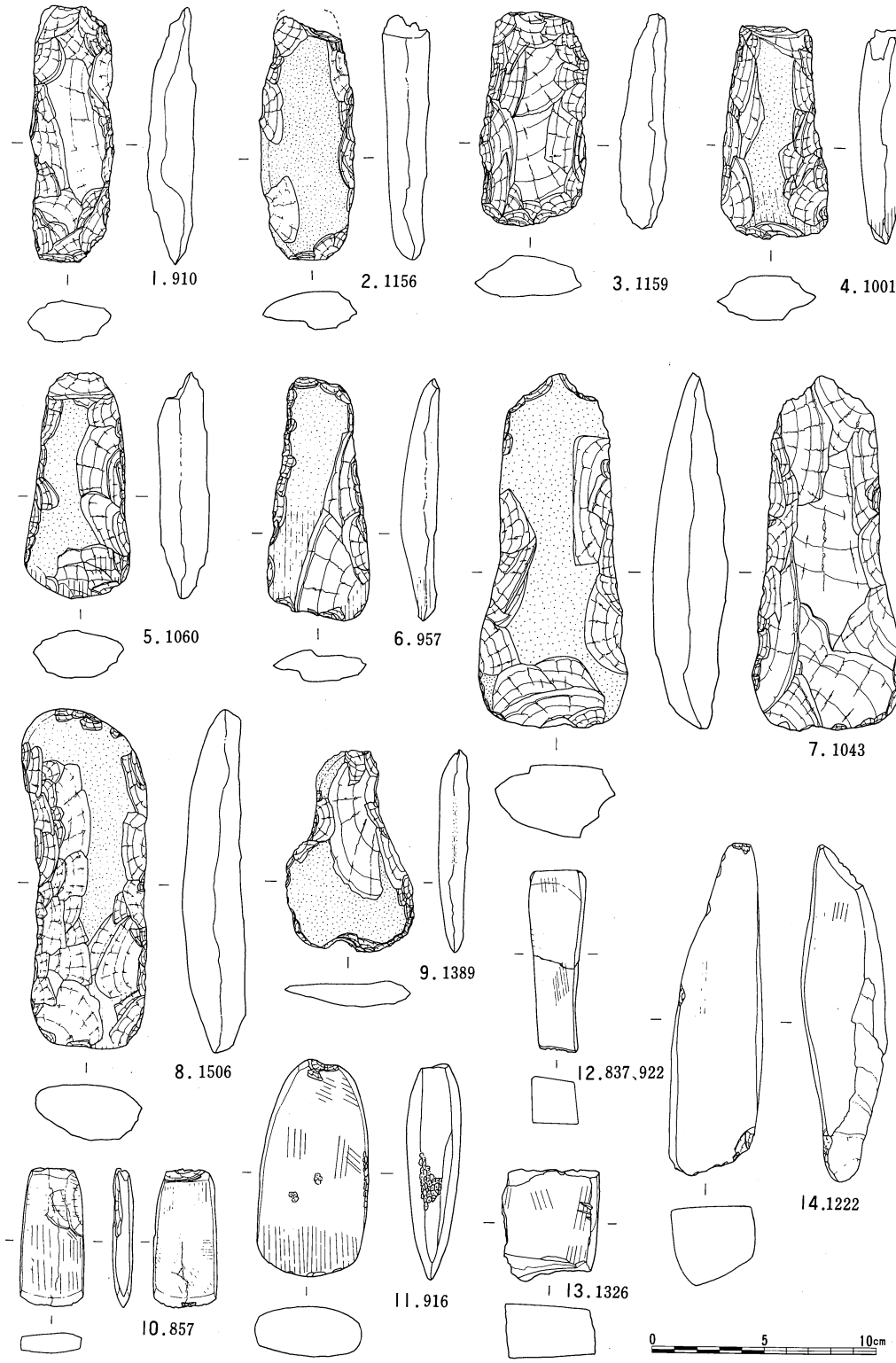
第10図　遺構外出土土器実測図（S＝$\frac{1}{3}$）

文具により刺突文を施す。2は釣手土器の釣手部で$\frac{1}{2}$個体である。頂央部から口縁部にかけての角度はほぼ直角に近いものと思われる。頂上部下端には8mmの深さで棒状の刺突がなされている。文様は頂央下位で止まる沈線文を両側の背に付ける。縁に沿って棒状施文具で連続刺突文を施し、間に雑な綾杉文を付ける。片側は間に斜条線を付ける。上面は全体的に粗雑で、内縁には調整時の握り指痕が顕著である。3はヘラ状施文具で雑に綾杉文を付けその上に縁取りの縦の沈線文を施す。器面の調整は雑で、胎土には白雲母が多く含まれる。4は棒状施文具で懸垂沈線文を付け地文にはヘラ状施文具で細い斜条線を施す。5・6は、棒状施文具で綾杉状文を施す。第9図27～31、第10図1～6は唐草文系III末（曽利IV）に位置付けられる。

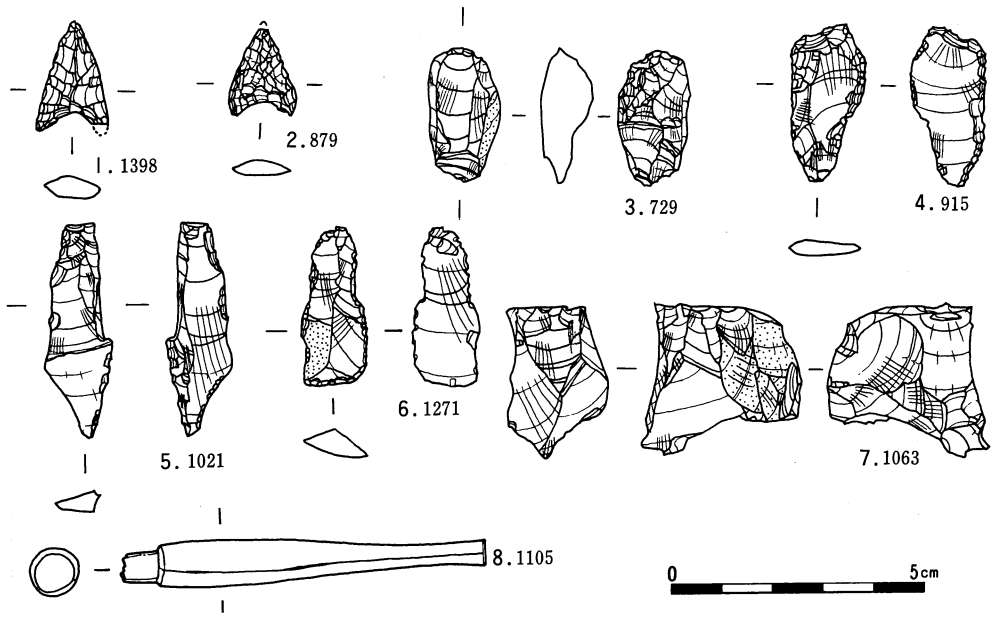
縄文時代中期末～後期初頭の土器（第9図2、第10図7・8・10）　第9図2は器面をナデた後、指頭で幅広の沈線文で区画し、「絡条体圧痕文」を施す。色調は淡褐色で、胎土には粗い長石･石英粒を多く含む。色調･胎土から見ると早期～前期にも考えられるが、文様構成や器壁厚（1cm）から見ると中期末に位置付けられよう。第10図7はＬＲの縄文を地文とし隆帯と沈線により区画を行い、沈線区画内の縄文をていねいに磨り消している。8は粘土紐をこぶ状に貼り付け棒状施文具で上端を除く3方から刺突を行う。下方にも細い粘土紐を縦に2条貼り付けナデている。色調は赤褐色で胎土には白雲母を多く含み、直径1.5mm前後の種子を含んでいたと考えられる空洞が数多く見られる。10は胴部片でかなり張り出すものである。横走隆帯と退化した渦状の貼り付けを行い、棒状施文具で区画内を刺突している。色調は淡灰褐色で、胴土には長石・石英・白雲母を多く含む。内面は指で横ナデをしている。

縄文時代晩期の土器　（第10図9）　壺形土器の胴部片と考えられ、貝殻条痕文を器面に斜めに施す。内面は指ナデをしている。胎土には長石・石英を多く含み、色調は淡灰褐色である。東海地方の貝殻山式～西志賀式第3類に類似する。

遺構外出土石器　第11図1～9、第12図1～7・8である。横堀・縦堀の覆土上層より出土。



第11図　第２号住及び遺構外出土石器実測図（S＝$\frac{1}{3}$）
〈１～９遺構外、10～14第２号住〉



第12図　横堀及び遺構外出土遺物実測図（S＝$\frac{2}{3}$、8のみ横堀）

打製石斧（第11図１～９）　２・４・５～９は自然が残る。１～３は短冊形で、４～６は撥形で、長さ10～12cm、幅４～4.5cm、厚さ２cm前後と形状的に似る。４～６は刃部が磨耗している。７・８は大型で長さ15～16cm、幅５～６cm、厚さ３cm前後を測る。８は上・下端ともに刃部をなしている。７は撥形、８は短冊形である。９は、撥形と分胴形の中間で、剝片を利用している。１が粘板岩、３が礫岩、９が緑泥片岩で、そのほかは硬砂岩である。

石鏃（第12図１・２）　１・２ともに無茎で、１はチャート製で中央部は厚みがあり、２は黒曜石製で平らである。

ピエスエスキーユ（第12図３）　長さ2.6cm、幅1.4cm、厚さ１cmで、上・下端打撃を加えており下半部の剝離は著しい。

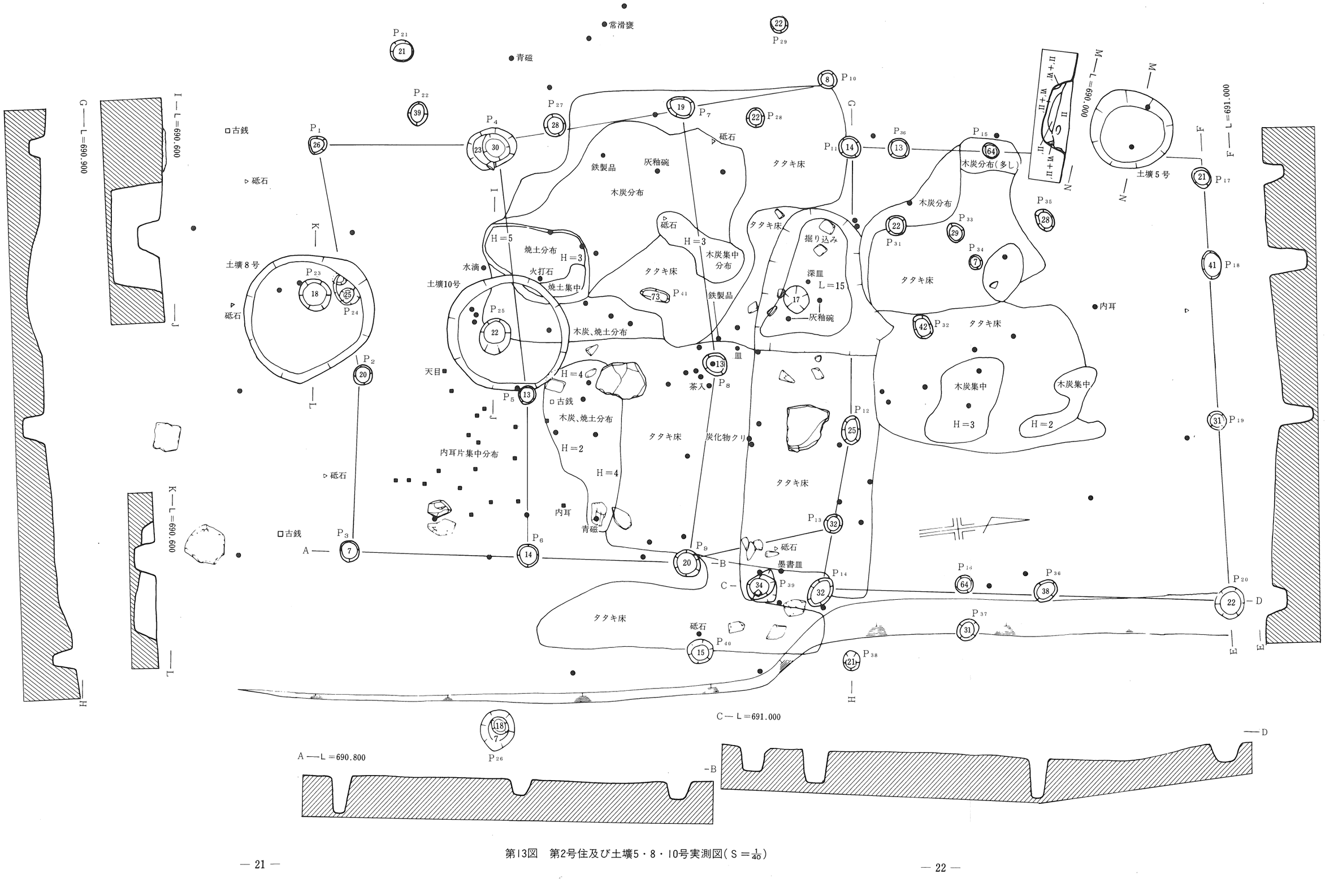
スクレイパー（第12図４・６）　４・６ともに黒曜石の剝片を利用し、上端を除く側面を調整している。４は先端が尖り、６は平らである。

石核（第12図７）　黒曜石製で、打撃剝離痕は上面に集中するが、側面にも見られる。

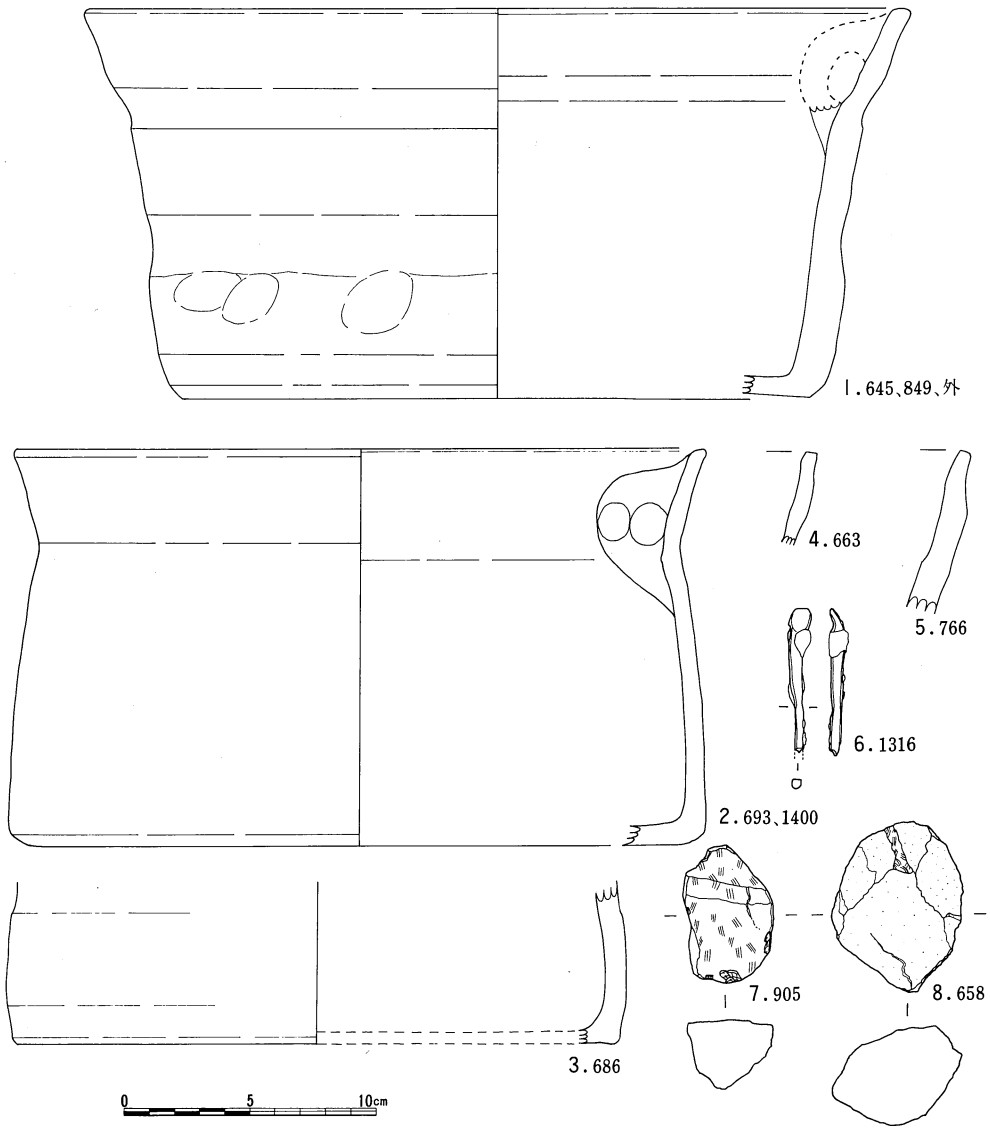
使用痕のある剝片（第12図５）　上端と左側面上半を除く側面に調整が施されている。先端が尖り形態から見て石錐の可能性もある。

〈中世〉

第２号住居跡　本跡は調査区東域中央部より検出された。柱穴はP_1～P_{20}・$P3_6$までが考えられ、P_1～P_9までと、P_{11}～P_{20}までの２棟をP_{10}・P_{28}、P_{14}・P_{39}でつないでいるものと考えられる。P_3－P_6－P_9は、柱間１間幅で一列に並び、P_2・P_5は直行する。P_14－P_{36}－P_{20}は柱間２m20cm－２m幅でほぼ一列、P_{17}～P_{20}は17を除き１m80cm－２m幅で直行する。そのほかの柱



第13図　第2号住及び土壙5・8・10号実測図(S＝$\frac{1}{40}$)

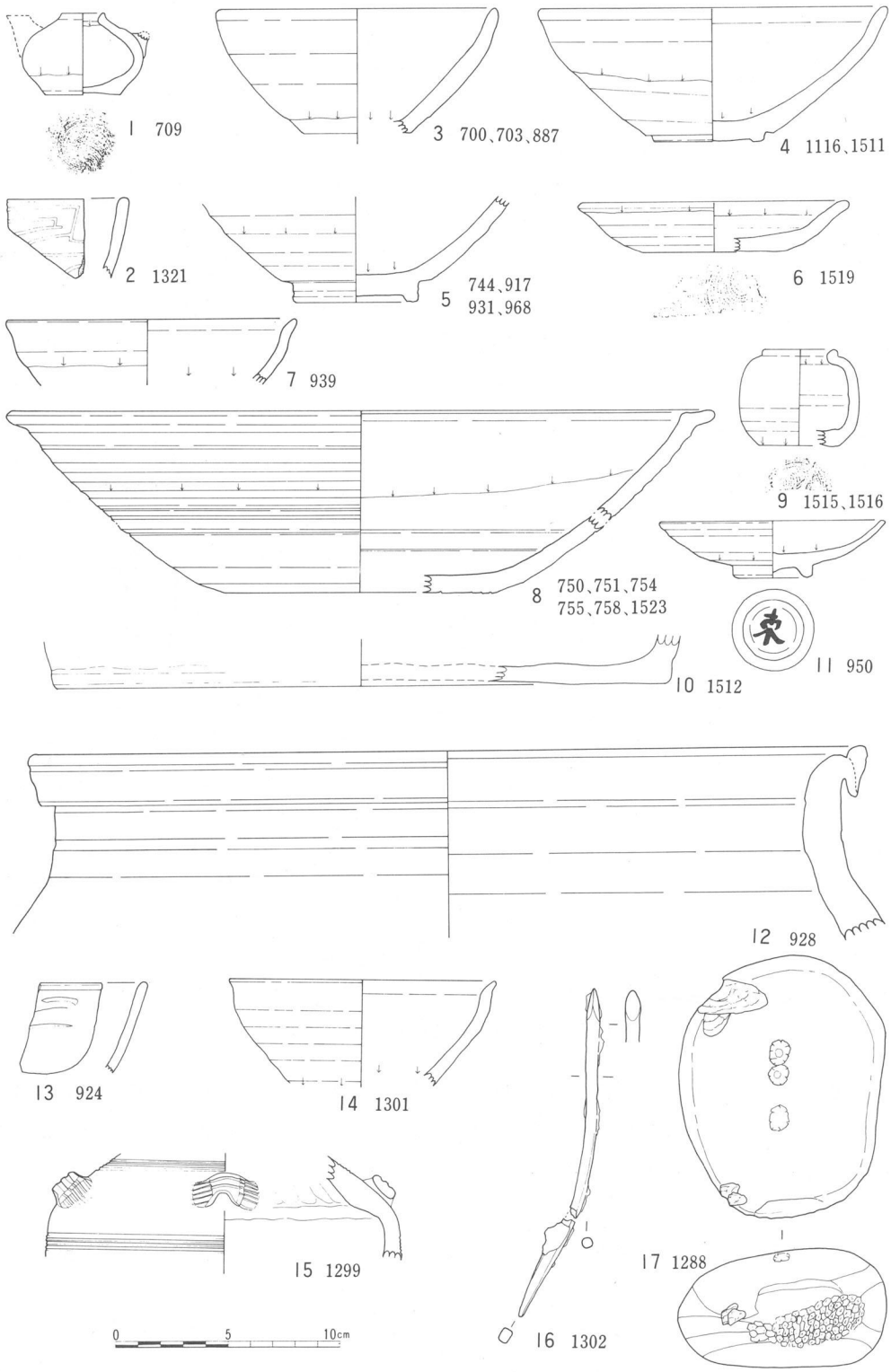


第14図　第2号住出土遺物実測図（S＝$\frac{1}{3}$）

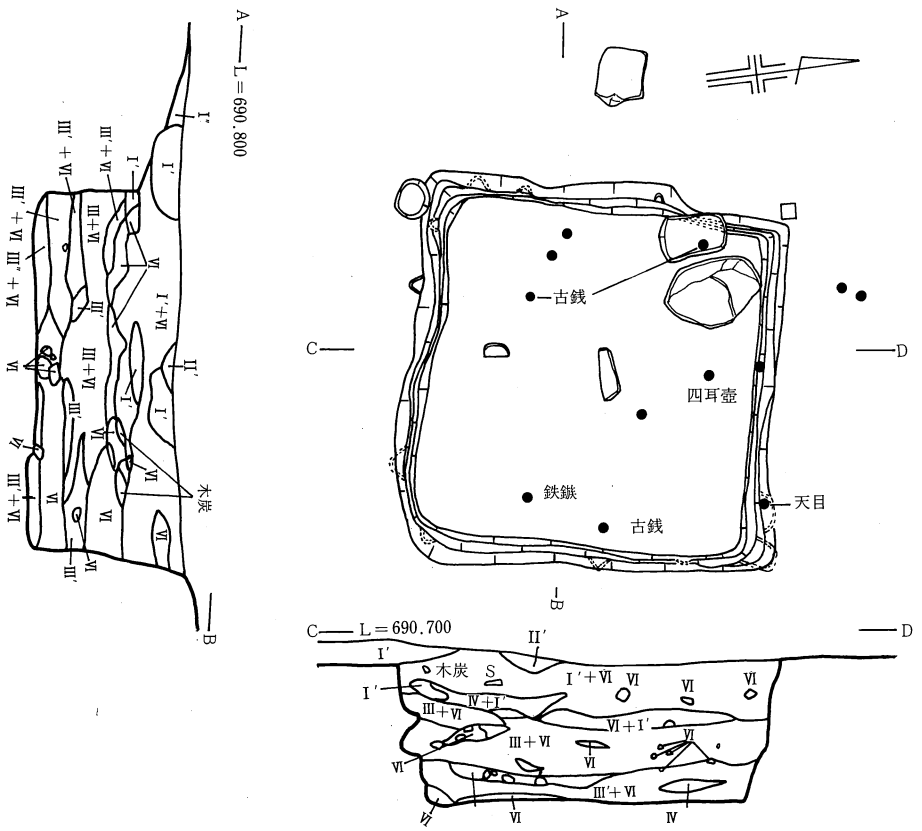
穴は直線上に並ばないが、第13図の様に柱配置を想定できる。大観して、P_1～P_9が東西軸4m30cm（約2間半）、南北軸3m60cm（2間）、P_{11}～P_{20}・P_{36}が東西軸4m60cm（2間半）、南北軸約3m90cm（約2間）であり、一連の棟とすれば、梁行2間、南北5間（つなぎ部含む）となる。

柱穴の平面形は円形が主で楕円形もある。深さは、13～41cmと整わないが平均20cm前後である。

床面は耕作時の攪乱によりノーマルではなかったが、東側には深さ15cmの傾斜面があり、なだらかに西へ延び、全体的にやや凹む。タタキ床が中央に見られ、南西と北西には焼土集中部分が



第15図　第2号住及び竪穴遺構1号出土遺物実測図
（S＝$\frac{1}{3}$、1～13第2号住、14～17竪穴遺構1号）

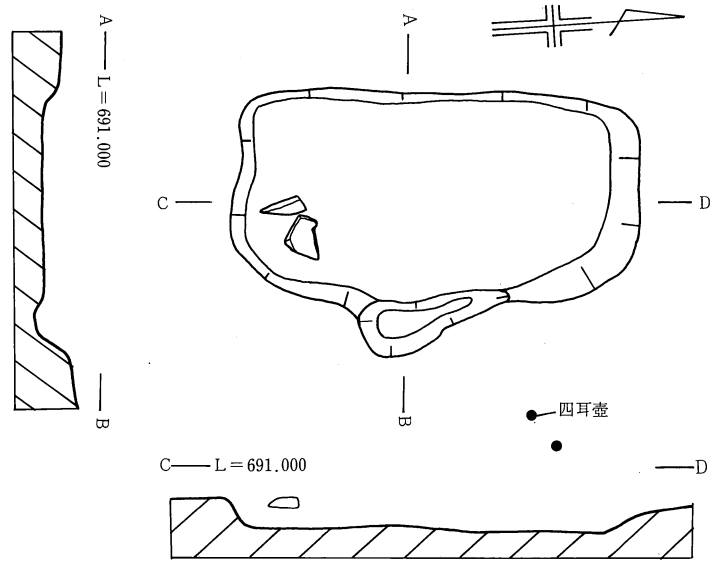


第16図　竪穴遺構１号実測図（S＝$\frac{1}{40}$）

あり、焼土が3～5cm、2cm前後遺存していた。中央部には1m50cm×1m20cm、深さ15cm～17cmの舟底状の掘り込みがあり灰釉平碗が出土。床面中央部に盤状の花崗岩2個遺存。

柱穴の内、P_{31}・P_{32}・P_{35}は間仕切の柱と、P_{38}・P_{40}は入り口部の柱とも考えられる。

遺物　第11図10～14、第14図、第15図1～13、第21



第17図　竪穴遺構２号実測図（S＝$\frac{1}{40}$）

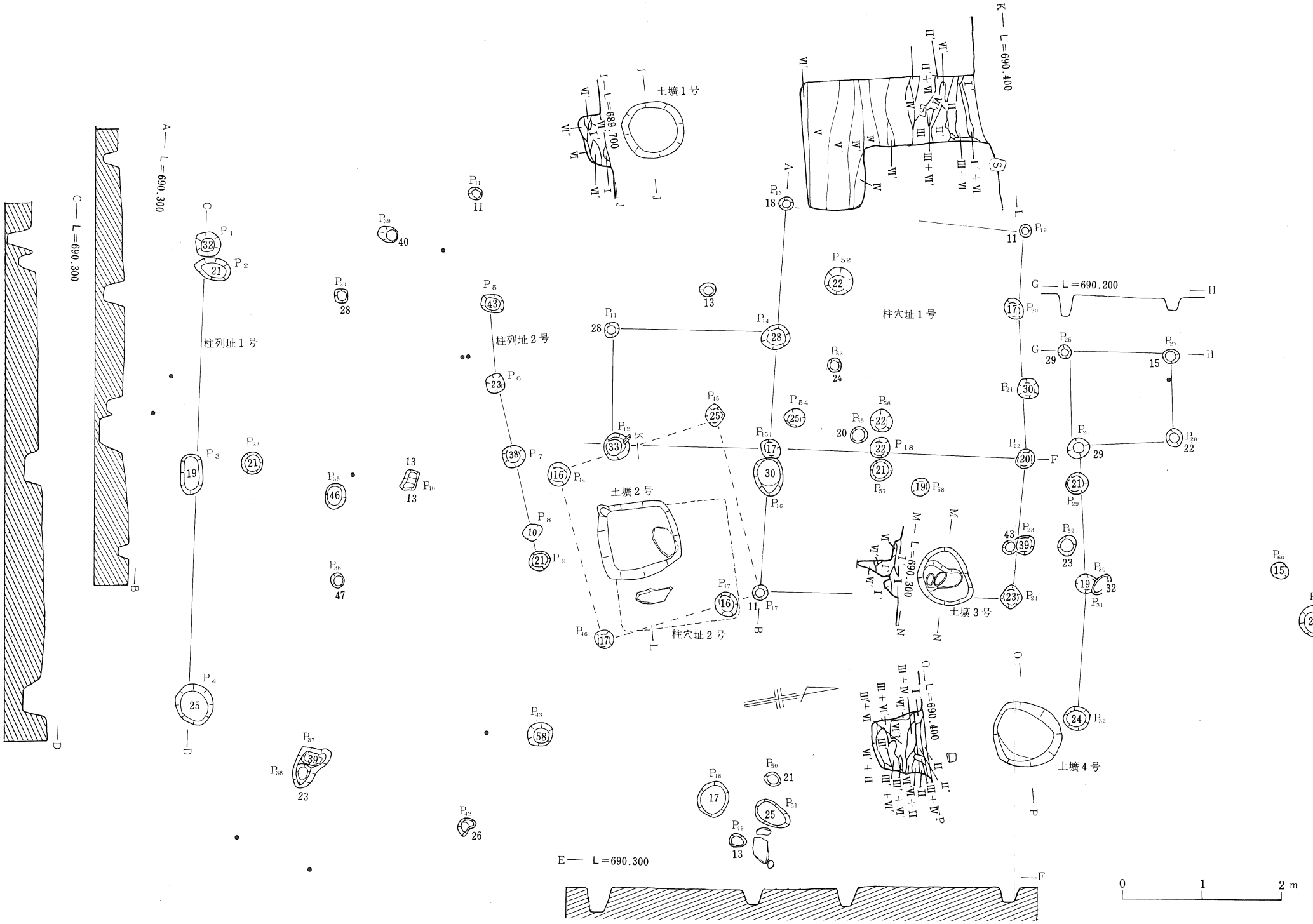
図１・２が出土している。第14図１～５は内耳土器で色調・胎土等から５個体である。１・２・４・５は口縁部が外傾し、１は厚手の胴底部をもつ。２は頸部のくびれが強く、３は底部の内傾が強い。６は鉄製品で先端がやや折れ丸鑿と考えられる。６・７は石英塊火打石である。第15図１は灰釉水滴$\frac{1}{2}$個体で注口部側と把手部を欠く。胴部に櫛目文を付ける。釉は厚く胴下部まで及ぶ。２は青磁碗口縁部で地に雷文を彫り、緑青色釉がかかる。釉変あり。３は天目茶碗で黒褐色に褐色斑が入る釉色をなし、釉は内面全体と外面腰までかかる。高台際はやや幅が広い。４は灰釉平碗で削り出し底部をもつ。緑黄色釉で胴中部までかかる。罅入あり。内面重ね焼痕跡残る。５は灰釉平碗で高台は高いが高台内は低い。淡緑黄色釉が胴中部までかかる。６は緑釉小皿で、口唇部より内側に緑灰色釉がかかる。７は灰釉平碗で口縁部上半まで淡緑色釉がかかる。８は折縁深皿で、内外胴央部まで緑黄色釉がかかり、外面整形は凹凸が著しい。口縁部は縦掘西域（A′・G′グリット）III層より出土している。９は鉄釉茶入$\frac{1}{2}$個体で胴下部まで暗褐色釉がかかる。10は内耳土器底部で、やや上げ底をなし内面は波状である。11は墨書皿$\frac{1}{3}$個体で内面全体及び外面胴下部まで乳白色釉がかかる。高台内には「朿」「朿」「朿」と読める墨書があるが判別しにくい。12は常滑大甕口縁部で口唇部は折り返し肥厚させ、やや外反する。13は青磁碗口縁部で地に唐草文を彫る。釉は暗緑色である。大まかな罅入あり。第11図10・11は磨製石斧で、ともに定角形であり、蛤刃をなす。この２点は縄文時代中期の石器である。12～14は砥石で、12は断面が正方形に近く小形であり、14は鰹節形をなし全面を砥ぐ。第21図１は元祐通寶、２は開元通寶でともに私鋳銭で、鎌倉末から室町期にかけて九州で鋳造されたものである。

竪穴遺構１号　本跡は第２号住より南に約２m離れて検出された。一辺約２mの方形をなす。深さは75cmを測る。断面は鍋形をなすが、壁は平坦でなく特に南・北壁は凹凸が著しい。床面は竪く全面的にタタキ状になっている。北西隅を除く３方の隅には壁にくい込む状態で掘り込みがある。堆積土状態は整層であるものの、ローム土及びロームブロックの混在が目立ち、下層よりIII′＋VI層15cm前後、VI層５cm、III＋VI層25cm前後、VI＋I′層10cm、I′＋VI層25cm前後が堆積している。北西隅には覆土上面に40～50cmの大礫（花崗岩）が２個遺存していた。出土遺物はIII＋VI層より上層から出土している。

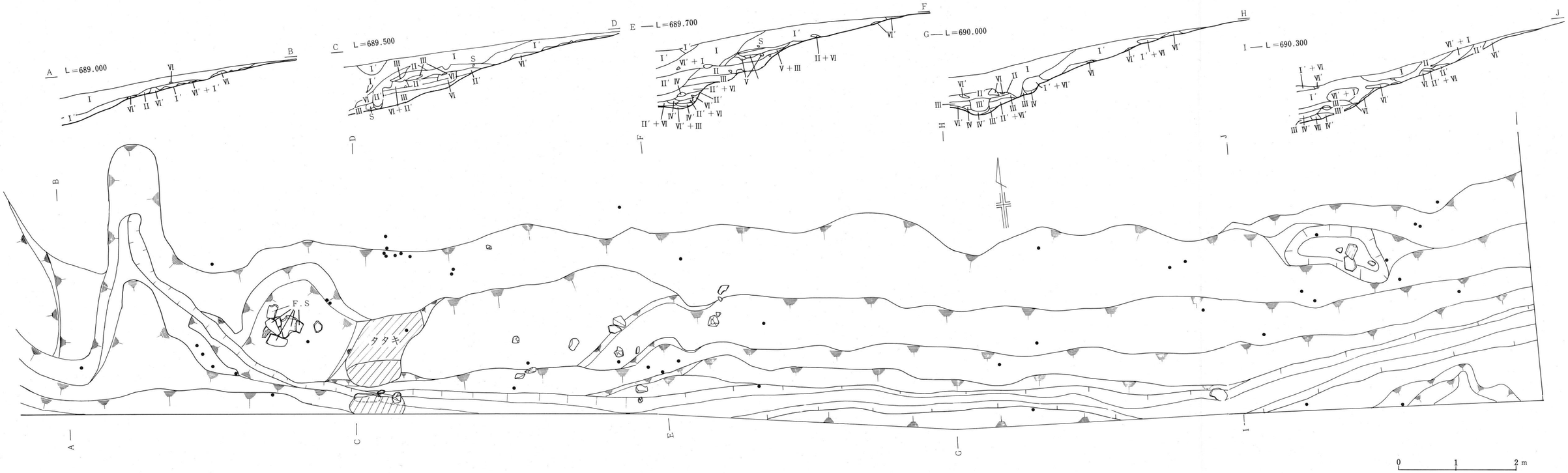
遺物　第15図14～17、第21図３～５が主なものである。第15図14は天目茶碗で口唇部は外反し、ややくびれる。釉は外面黒色、内面黒褐色である。外面釉面下は調整の凹凸が顕著である。15は灰釉四耳壺で淡灰緑色釉である。耳部は退化しはじめており２条の刻み目と櫛目で押さえ付けている。耳をはさんで肩と胴に櫛目条線を施す。内面接合部に厚く指頭圧痕が残る。16は鉄鏃で先は木葉形をなし、ほぼ完形である。17は敲打器で雲母片岩である。17は縄文期の遺物である。第21図３は嘉祐通寶、４は宣和通寶（宋銭、宗微宗1100～1125）、５は元豊通寶である。

竪穴遺構２号　本跡は調査区北域より検出された。南北２m18cm、東西１m10cmで隅丸長方形をなすが、東壁に不整円形で深さ８cmの小穴がある。南壁覆土上層に砂岩自然石が２個遺存。

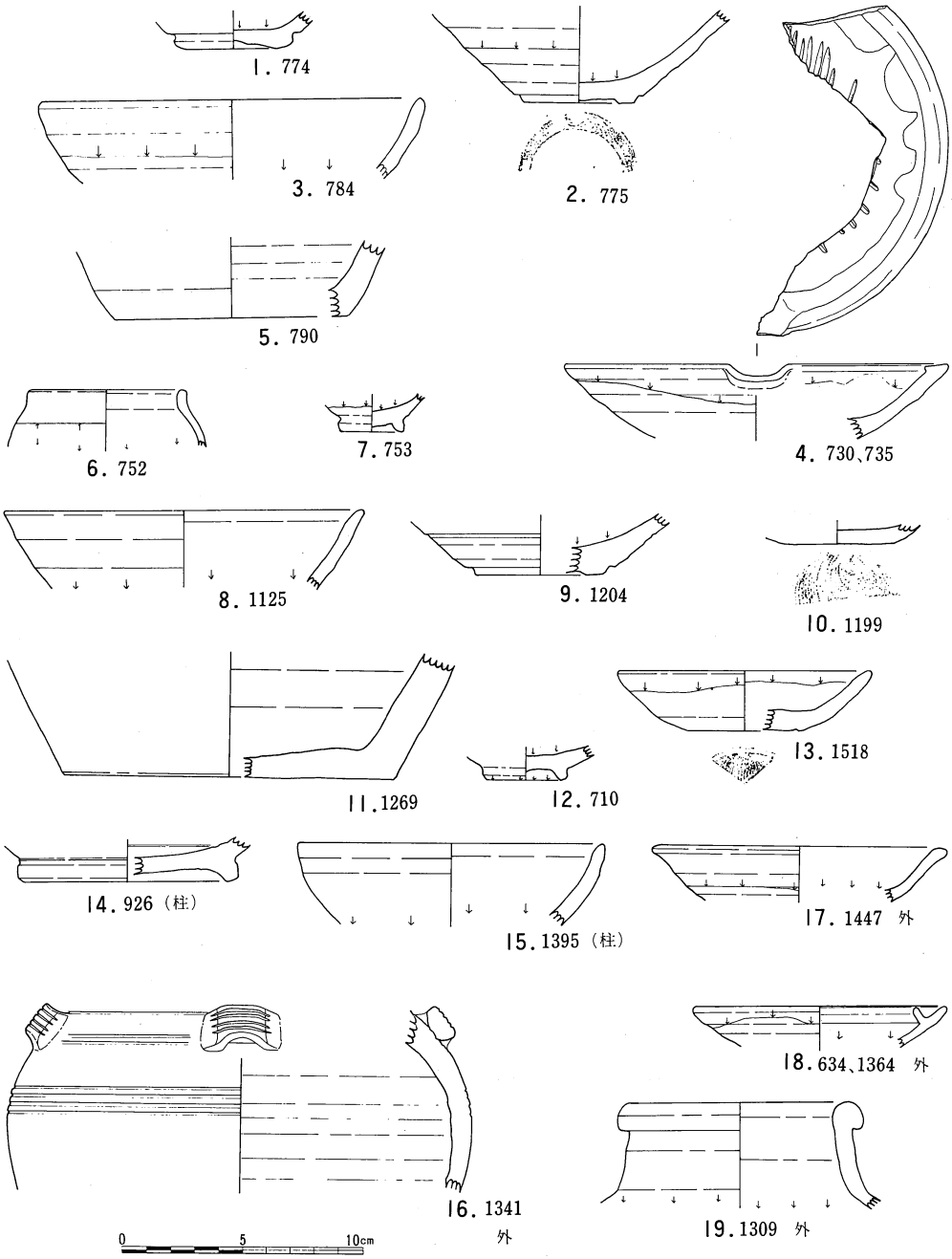
遺物　遺構からは出土していない。北東60cmの地点から第20図16の灰釉四耳壺が出土してい



第18図　土壙1～4号、柱穴址1・2号実測図（S＝1/60）



第19図　縦堀実測図(S = 1/60)

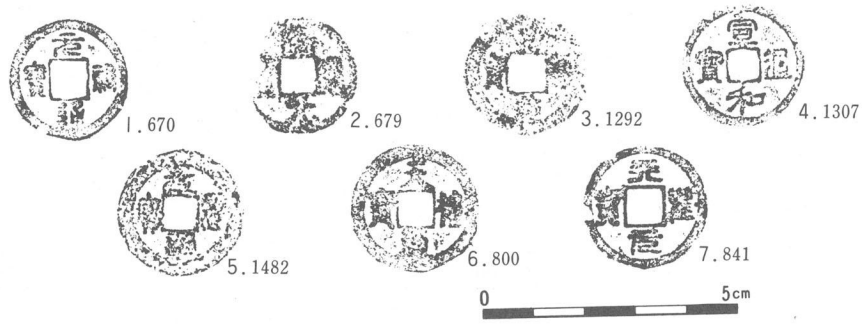


第20図　縦堀(1～7)、横堀(8～11)、土壙2号(12)、柱穴址群(14,15)、遺構外(13～19) 出土遺物実測図(S＝$\frac{1}{3}$)

る。耳部には4条の刻み目があり肩に4条耳部に2条胴部に4条の櫛描条線文を施す。淡緑色釉。

柱穴址群　本跡は調査区のほぼ中央より検出され、東西9m、南北15mの範囲に分布している。

柱穴址1号　P_{11}からP_{32}により想定される。P_{13}～P_{17}は直線上にあり、P_{13}～P_{14}は1m70cm、P_{14}～P_{15}は1m40cm、P_{15}～P_{17}は1m80cmを測り1間—5尺—1間である。これに対応するの



第21図　第2号住(1、2)、竪穴遺構1号(3～5)　縦堀(6、7)出土古銭実測図(S＝$\frac{2}{3}$)

がP19・P22・P24で、P20・P21は狭ますぎる。ただし、南北の間隔が3m20cmと広く、東・西に柱穴がなく中心にP18が遺存しているだけである。柱穴は円形で深さは11～30cmと一定でない。P11・P12はP14・P15と対応し東西1m40cm、南北2mの間隔をもつ。P19～P24に対応して、やや東へずれるが、P25～P32が直線上に並びP25～P29が1m70cm、P29～P30が1m30cm、P30～P30が1m70を測りP13～P17の間隔と近似する。P25・P26はP27・P28と対応し一辺1m20cmの間隔をもつ。基本的にはP13～P24の2間×3間の棟に、南側に入口部、北側にこまやと塀を設けた建物と推定できる。

遺物　本跡周辺より第20図14･15が出土している。14は灰釉皿か瓶（東濃産10C代）の破片を硯などに再利用したものと考えられ、内面は磨耗している。15は天目茶碗で口唇部はやや外傾ぎみに立つ。釉色は黒褐色で褐色斑をもつ。

柱穴址2号　P17・P44～P46の4本が想定され、1辺2m10cm前後（7尺）の間隔をもつ。土壙2号の風雨除けのための上屋かとも考えられる。が、P17は柱穴址1号に含まれる点に疑問が残る。

柱列址1号　P1・P3・P4はほぼ2m80cm間隔（1間半）で東西に並ぶ。P1は深さ32cm、P3は19cm、P4は25cmで、1・4は円形、3は楕円形をなし一定しないが、底は堅い。これにP34・P35・P37が対応すると思われるが不等間隔である。

柱列址2号　柱穴址1号と柱列址1号の中間に位置し、P5～P9までが東西に並ぶ。P5～P8はほぼ1m間隔に並ぶがP8－P9間が40cmと狭まい。柱穴は円形で深さは10～43cmを測る。

土壙1号　本跡は柱穴址群の西より検出された。直径75cmの円形をなし、断面は鍋形であり底は柔らかい。覆土はVI及びVI'層が占める。出土遺物はない。

土壙2号　本跡は柱穴址群の中央より検出された。開口部は1辺90cm（3尺）の隅丸方形をし、1m50cm掘り下げた所から東へ65cm、北へ70cm広がり内部は1m50cmの方形をなす。形状から見て「室」と判断できる。広がりをもつ地点に長さ40cm幅25cmの砂岩が遺存していた。覆土は、I層からV層までノーマルに堆積しており、底直上からは木炭が検出された。底面は堅く平坦。

遺物　第20図13はIII層（中位）中から出土している。緑釉小皿で釉色は緑灰色である。底部は厚

く、糸切りをしている。

土壙4号　柱穴址群内北東域から検出された。直径90～95cmを測り、不整円形である。深さは65cmを測り底面は柔らかくやや傾斜する。断面は鉢形をなす。覆土はIII層が主体を占めるが、VI′層との混土層が多い。出土遺物はない。

土壙5号　第2号住北西より検出された。長軸90cm、短軸85cmでほぼ円形をなす。深さは24～28cmを測り、断面はタライ状で、底面は柔らかく傾斜する。覆土はII・II′層が主体である。

遺物　第15図8の折縁深皿胴部片と粘土塊がII層中より出土している。

縦堀　調査区の南端より東西軸に沿って検出され、西側横堀と合流し終熄する。現況では長さ28m、底幅60cm、深さ15cmを測る。台地末端の傾斜地の下段に位置し、東方の山麓際を流れる天王川から導かれてきたものと考えられる。底面には砂層の堆積は見られない。北側斜面はゆるやかな3段から4段の変化をもつ。南側は土手のため調査はできなかったが、南へさらにゆるやかに傾斜し、現農道の南側で急傾斜をなしていたと考えられる。北斜面東域には1m80cm×70cmの規模の凹みがあり深さは10cm前後である。花崗岩自然石が大小4個遺存していた。また西域には直径2mの不整円形状をなすテラスがあり、焼けて煤けた花崗岩・花崗閃緑岩が8個遺存していた。このテラスの東には、南北1m60cm、東西1mの規模でローム土のタタキ部分が検出された。状況から判断して、「洗い場」とも考えられる。周辺からは、卸皿、折縁深皿等が出土している。

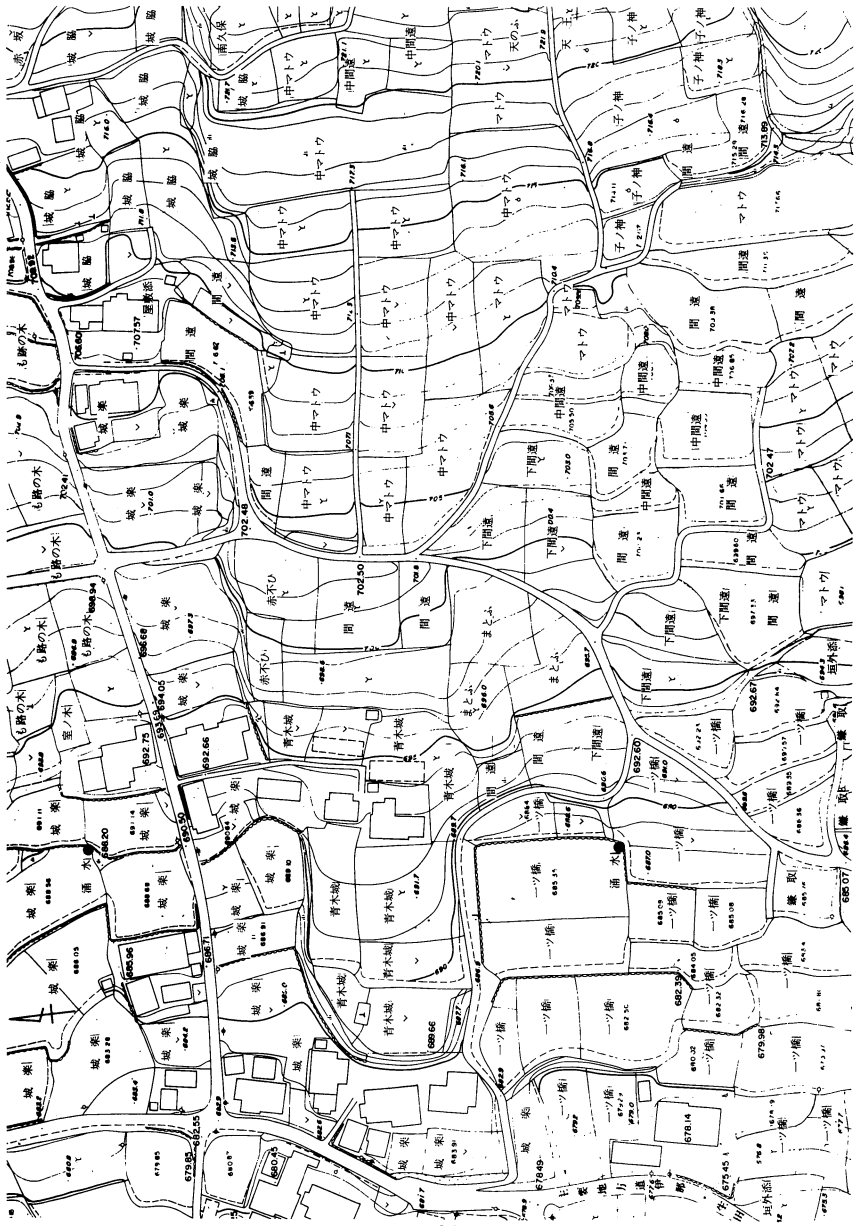
遺物　第20図1～7がII～III層中から出土している。1は天目茶碗底部で黒褐色釉がかかる。付高台で高台内はヘラ削りである。煤ける。2は灰釉碗で緑灰色釉。高台は糸切りした後、ヘラ削り出している。内面重ね焼痕残る。1同様煤ける。3は灰釉皿で大型である。釉色は緑黄色で、外面は口縁部下で釉は止まる。煤ける。4は片口付卸皿で釉は緑灰色。口唇部内外に厚く雑にかけている。口唇部は内反りをなす。煤ける。5は焼成不充分で鉄釉が雑にかかった壺底部である。6は鉄釉小壺口縁部で外面口唇部を除き内外ともに黒色釉がかかる。7は灰白色釉のかかった坏胴下半部で付高台である。酒坏か。

横堀　調査区の西端より台地南北軸に沿って検出された。現況では長さ28m、底幅1m20cm、深さは南側で1m20cm、中央部で1m35cm、北側で1m55cmを測り北にかけて深くなる。断面形は「箱薬研堀」をなし、土層はノーマルであるが底面には砂層の堆積は見られない。西側は調査区域外（ほ場整備対象外）のため未調査であるが、第4図中E－F・G－H断面より判断すると底面より同傾斜で開口部に至らず、ゆるやかに掘り込みがなされ、西域の基盤に達して行くと考えられる。また地形から判断すると、北側は現在の台地の地形に沿って延びて行くと想定できる。堀の北域覆土上層から中層上位にかけて花崗岩・花崗閃緑岩、砂岩等の自然石の集石が見られる。図には表現してないが、第1号住北西にも同様に遺存していた。遺物はII～IV′層中に分布。

遺物　第20図8～12・第12図8が図示できたものである。8は鉄釉茶碗口縁部で、茶褐色釉。釉表面は鉛色に光沢をもつ。9は灰釉平碗底部で、緑灰色釉。底部は糸切り後、ヘラで削り出して

いる。内面には重ね焼痕が残る。煤ける。10は縁釉小皿底部で、底上部に茶色の釉がとんでいる。糸切り底である。11は常滑大甕底部で外面は赤褐色をなし、内面は灰緑色釉がかかる。底は上げ底で、焼成時に窯内の土が付着し同時焼成されている。12は灰白色釉を高台内まで施す碗底部である。付高台。第12図8 はきせるの吸口部で、真鍮製と考えられる。内部には雁首との間をつなぐ竹管が残存している。

遺構外出土遺物　第20図17～19は、調査区末端II層より出土している。17は鉄釉稜皿で、黒褐色釉がかかる。口唇部はやや肥厚し外反する。18は茶褐色釉がかかったつばの付いた小皿で、灯明皿の受け皿である。19は広口壺の口縁部で、折返口縁をなし内傾する。焼き締めと考えられるが、外面に褐色釉がかかる。常滑より渥美に似る。



第22図　青木城周辺小字名分布図（約S＝1/2,500）

第Ⅳ章　ま　と　め

今回の青木城遺跡（館址）の調査により検出された遺構は縄文時代中期後半の竪穴住居跡１軒、同時期土壙４基、室町期の掘立柱平地住居（第２号住改め）１軒、掘立柱建物址（柱穴址１号改め）１棟、柱穴址１ケ所、柱列址２ケ所、室状遺構（土壙２号改め）１ケ所、竪穴遺構２ケ所、縦堀１条、横堀１条、時代不明土壙５基である。

今までに調査された遺構（青木遺跡含む）は、上記に平安時代末の竪穴住居跡１軒、同焼土集中箇所１ケ所、室町期の掘立柱平地住居（青木、第１号住改め）１軒、縦堀３条、横堀１条、礎石、柱穴址群（掘立柱建物址）２ケ所、柱列址１ケ所、土壙３基、集石址１基、焼土集中箇所、配石遺構２ケ所、16世紀末以降の敷石火葬墓１ケ所である。

遺構は縄文時代中期後半、平安時代末、室町期、近世以降と長い時間幅をもって検出され、遺物も遺構に伴い出土し、少量であるが縄文時代早期末から前期、後期、晩期、弥生時代後期の土器も見られ複合遺跡としての性格をもつが、ここでは主体をもつ室町期の遺構・遺物―青木城館址―のまとめをする。

「掘立柱平地住居」　柱穴は上屋構造を推定できる配置で検出されていないが、大観して、梁行（東西）２間、桁行（南北）５間の切妻と想定する。床面は東側に傾斜をもち中央部に東西５m、南北６mの範囲にタタキ床を残す。タタキ床面西域にある２ケ所の焼土集中箇所は囲炉裏状の堀り込みから除去されたものと考えられる。遺物はタタキ床面上に多く分布し、南東部の内耳集中分布状態は注目される。厨房的建物と推定できる。第15図１の水滴は14Ｃ瀬戸産で遺物中最も古いもので伝世品であろう。２は近世の青磁、13は北宋耀州窯の青磁（13～14Ｃ）であろう。３の天目、４・５・７の灰釉平碗、６の縁釉小皿、８の折縁深皿は15世紀前半から後半古瀬戸後期（窖窯）、９の茶入は16世紀半ば（大窯）、12の常滑大甕は第Ⅳ段階14世紀半ばから15世紀前半に位置付けられる。11の墨書皿は近世以降のものである。

「掘立柱建物址」　梁行（南北）２間、桁行（東西）３間の片面庇切妻と想定する。南側に５尺×７尺の「入口部」、　北側に２尺幅の「土間」（通り）を挟んで、４尺四方の「こまや」東へつづいて約２間の「屏」又は「柵」で構成される建物址と推定する。が、南と北の桁行の柱が対応しないことや中央に柱が３本一列にあること等から、建替えや形状の違う建物址とも考えられる。第20図14は灰釉皿か瓶で10Ｃ代東濃産であるが内面が磨耗している点から硯等に再利用したものと考えられる。15は天目で15世紀前半から後半古瀬戸後期（窖窯）に位置付けられる。

「柱列址１号」　柱間１間半の「門址」かと推定される。なお、第18図中P_2・P_3・P_{34}・P_{35}は位置等から考えて「物見台」「物見櫓」の存在の可能性もある。

「柱列址２号」　柱間３尺長さ１間半の「屏」か「柵」と考えられる。

「室状遺構」　開口部３尺四方、底面５尺四方の「室」と考えられる。第20図12の縁釉小皿は

15世紀前半から後半古瀬戸後期に位置付けられる。

「竪穴遺構１号」　１辺約２m（約７尺）の方形の竪穴で、上屋を支える柱穴をもった「室」等の貯蔵用施設と考えられる。第15図14の天目は16世紀前半（大窯）に、15の灰釉四耳壺は15世紀前半から後半古瀬戸後期に位置付けられる。16の鉄鏃も同時代であろう。

「縦堀」　東方の山麓から堀り続けられてきたものであり、底幅60cm深さ15cmをもって、横堀と合流し終熄する。第20図１の天目、２・３の灰釉平碗、４の灰釉片口卸皿は15世紀前半から後半の古瀬戸後期に位置付けられ、６・７は近世以降のものである。

「横堀」　底上端幅１m20cm、底幅50～60cm、深さ１m20cm～１m55cmの「箱薬研堀」である。第20図８・９の灰釉平碗、10・13の縁釉小皿は古瀬戸後期（15C代）に位置し、11の常滑は14C～15C、12の灰釉碗は近世以降である。

〈青木城（館址）の構造領域について〉

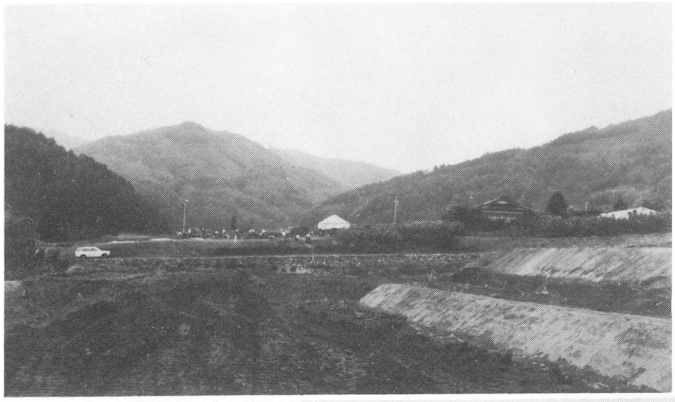
局部的な調査の成果の上に構造を述べることは僭越であるが、試論としての検討資料とする。舌状台地先端部を利用した曲輪（西側先端部）を備えた単郭方形の館址と考えられ、一辺約20間を測る。曲輪は北側にも巡る。なお、大正頃まで土塁と濠を残していたと言われる。館址としての領域は、台地東方250mまでに及び、掘立柱平地住居、掘立柱建物址、焼土集中箇所等が検出されていることは居館の変遷や支配層の居住等を示唆するものである。縦堀は東方山麓を流れる天王川より導き、舌状台地を三分割して郭両端に至ると考えられ、その間に区画の為の浅い横堀を南北に設けていたものであろう。周辺の小字名を見ると、郭北域に城楽、北東域に城脇、南域に一ツ橋、南東城に下間遠一間遠、東域に中マトウ（中間遠）が多く、特に南西隅に垣外添、南東中央に垣外添、北東に屋敷添、南東域に子ノ神があり、明らかに領域を示すものである。又、北東域中央より北にかけては室ノ木、も路の木の名や、梛桃畑、梯ノ木畑、新三畑、漆ノ木畑、榎木畑、小畑ケ等の小字名があり、生産領域を示すものとも考えられる。この外、北東周辺には南久保、天のふ、平清水、三郎屋敷、八王子等の小字名があり注目される。

〈築城から滅亡について〉

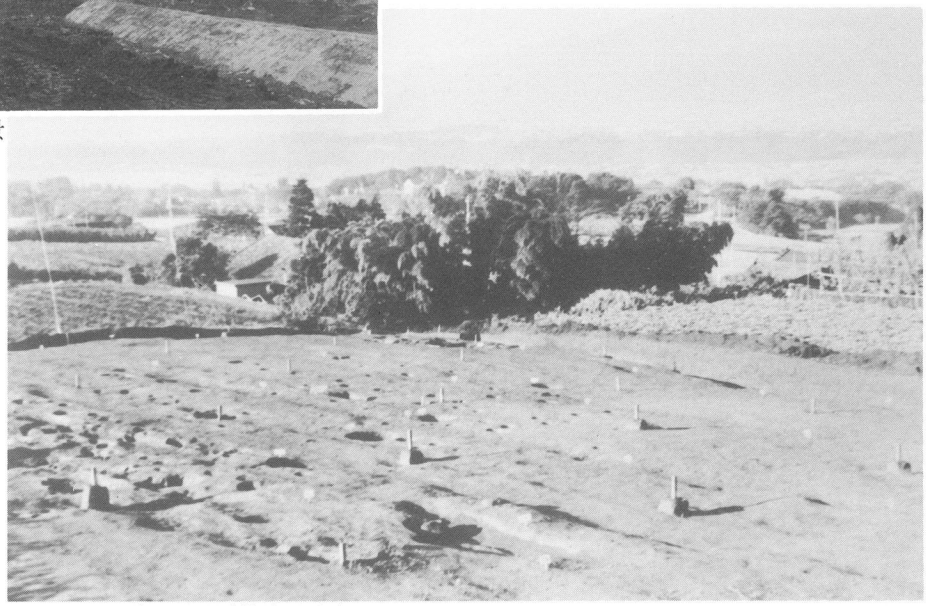
築城・滅亡についての文献記録はないが、関係する文献として、大永四年（1524）『諏訪磯幷宝殿造営日誌』に「日山」の地名が、天正十年（1582）『恵林寺文書』に「（前略）中脇(澤)衆起請一紙　中山弥左右門」の名が見られる。また、火山新井字八王子にある高山神社棟札（天正十六年一1588）に「大檀那牛(牛カ)山弥左衛門尉神継安公武運長久子孫繁栄無災延命富　自在所」「奉建諏方磯並両大神　幷大工馬場式部助安貞干時天正十六年戊子小春二十二日葵寅辰書之」とある。以上のことと館址から出土した陶磁器より室町初期に基礎的な築城がなされ、室町中期から後期にかけて全盛し、戦国時代末に滅亡したものと推定できる。

青木城について以上の様な大略かつ想定の多いまとめとなりましたが、浅学のため誤りの多いことと思われる。大方の御教示を是非いただきたい。文末で恐縮ですが、陶器鑑定をお願いした瀬戸市歴史民俗資料館長宮石宗弘氏、同学芸員藤澤良祐氏、又、文献等の御教示をいただいた市誌編纂室長小池宏氏、倉田文和氏に記して感謝を申し述べます。　（小原晃一）

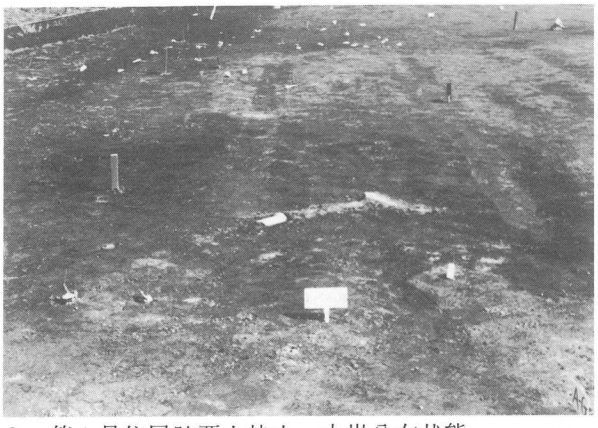
図　　版



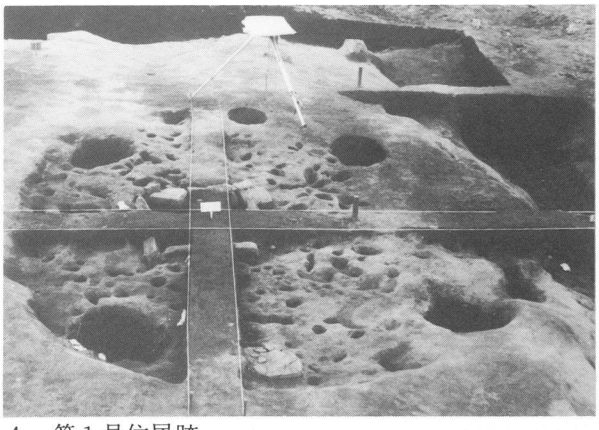
1．青木城遺跡D地区遠景（南より）



2．D地区遺構全景（北東より）



3．第1号住居跡覆土焼土・木炭分布状態

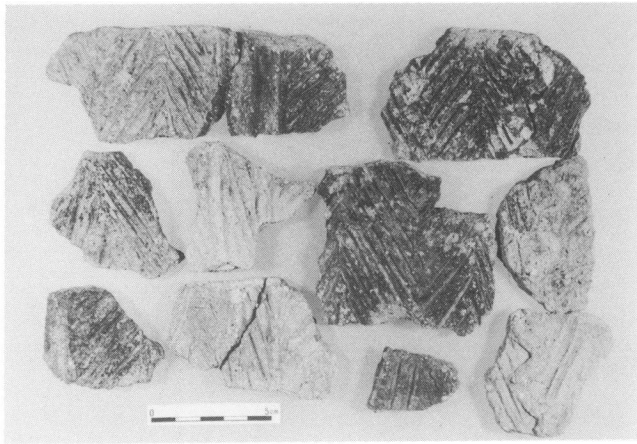


4．第1号住居跡

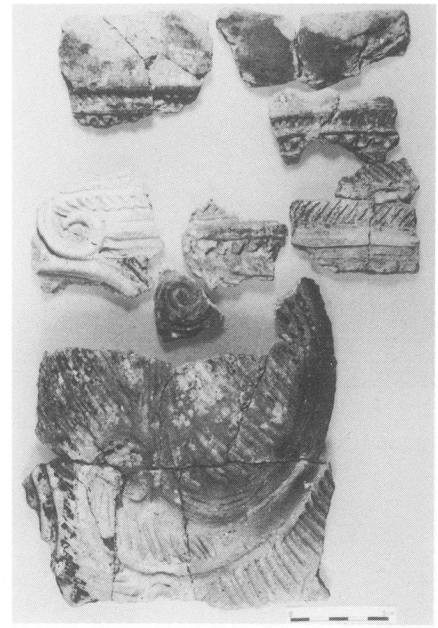
5．第1号住居跡炉址

6．第1号住居跡石棒出土状態

図版2

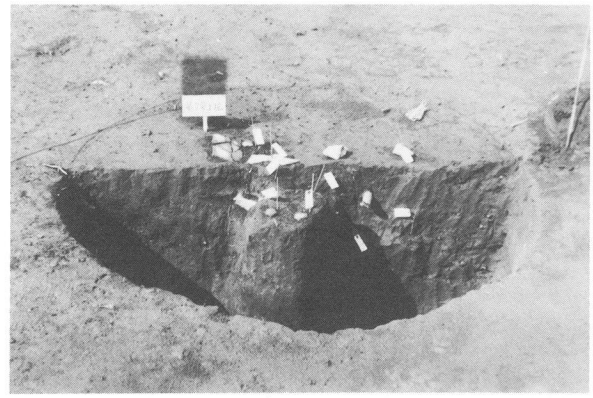


1．第1号住居跡出土深鉢形土器

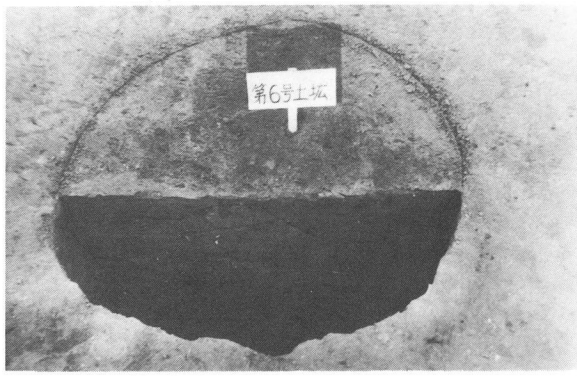


2．第1号住居跡出土深鉢形土器

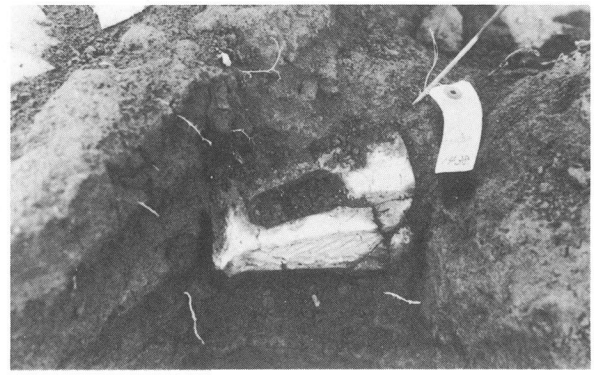
3．第1号住居跡出土石棒



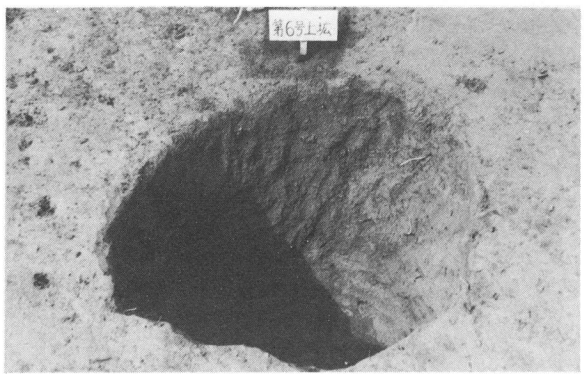
6．土壙7号断面及び遺物出土状態



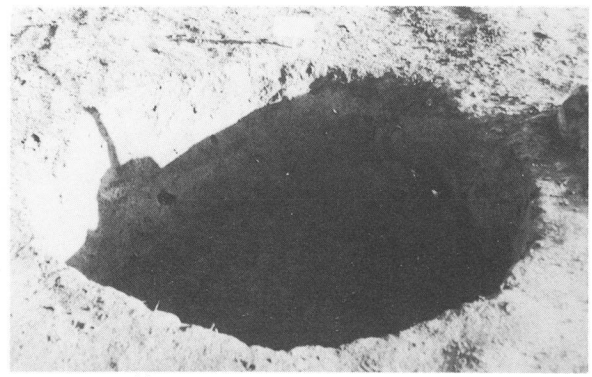
4．土壙6号断面



7．土壙7号台付土器出土状態



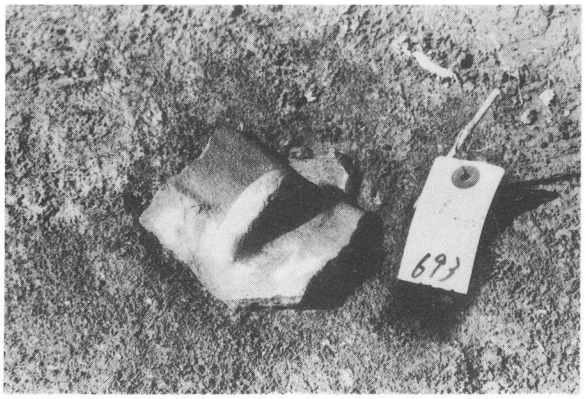
5．土壙6号



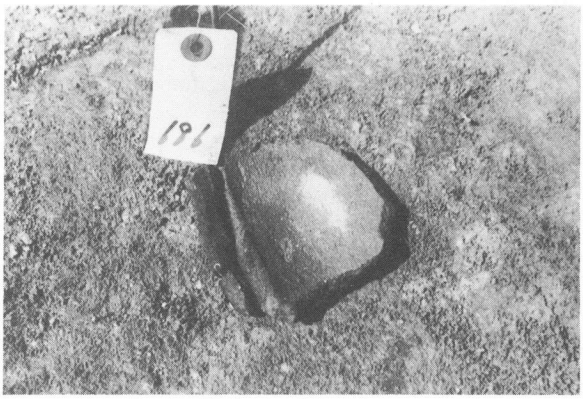
8．土壙7号

1．掘立柱平地住居跡(第2号住改め)遺物出土状態

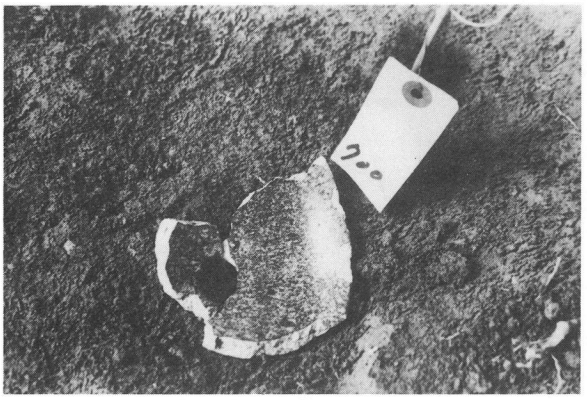
2．掘立柱平地住居跡



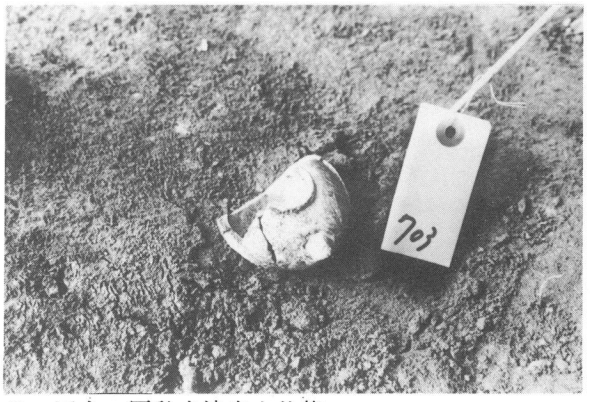
3．掘立柱平地住居跡内耳土器出土状態



4．同左　内耳土器出土状態

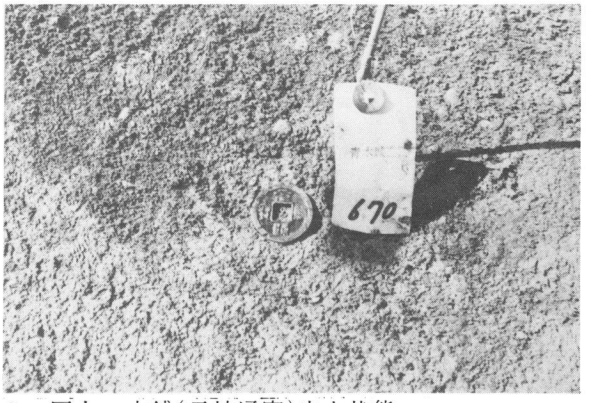


5．同上　天目茶碗出土状態

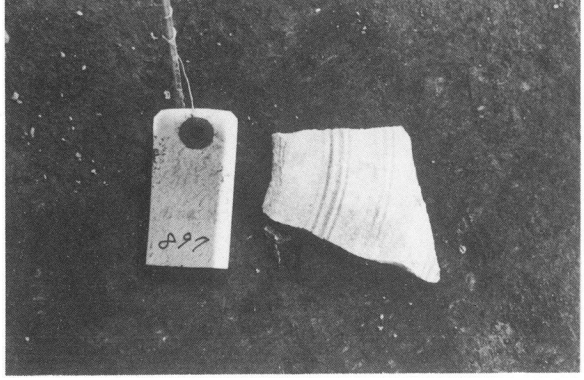


6．同上　灰釉水滴出土状態

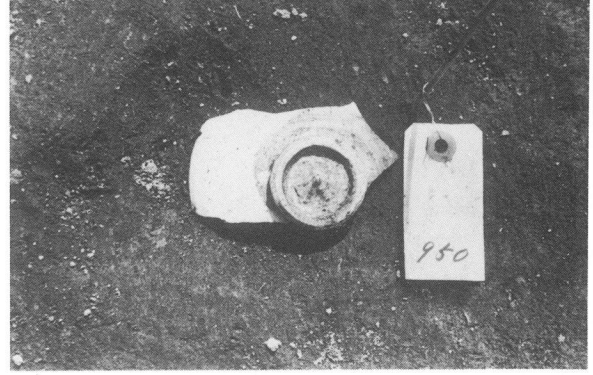
7．同上　灰釉平碗出土状態



8．同上　古銭(元祐通寶)出土状態



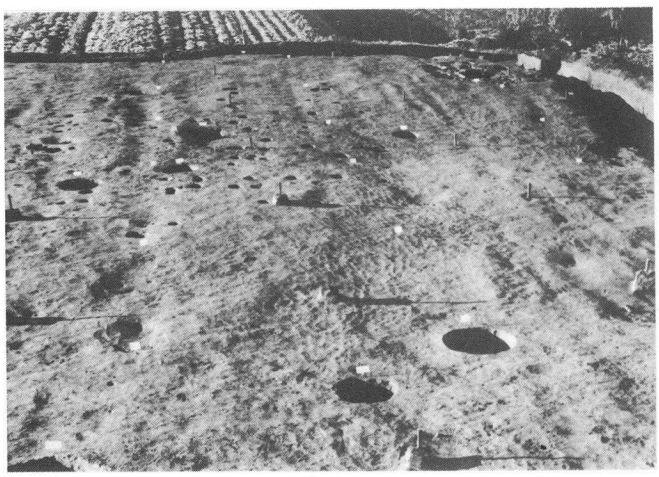
1．掘立柱平地住居跡四耳壺出土状態



2．同左　墨書陶器皿出土状態

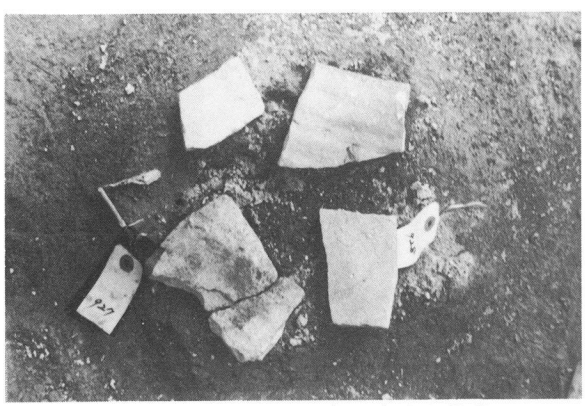
3．同上　磨製石斧出土状態

4．同上　磨製石斧出土状態

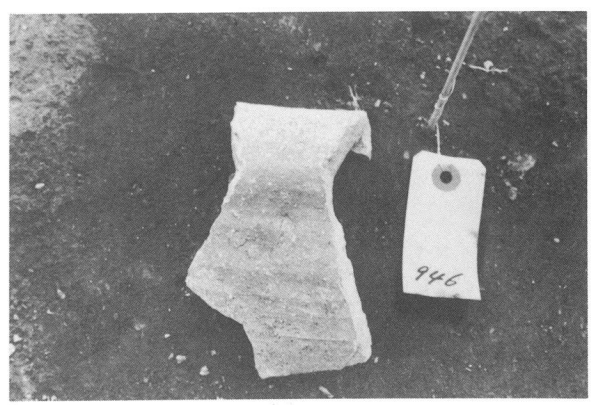


5．柱穴址群・柱列址群全景(北より)

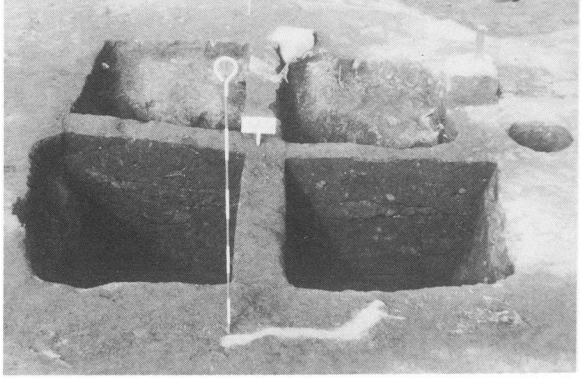
6．柱穴址群近景



7．柱穴址群周辺内耳土器、常滑甕出土状態



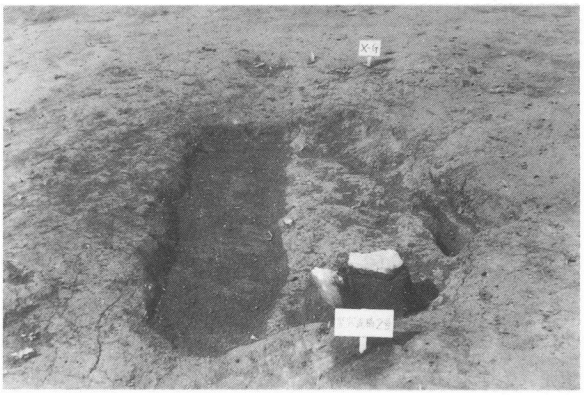
8．同上　常滑甕出土状態



1．竪穴遺構1号ベルト断面

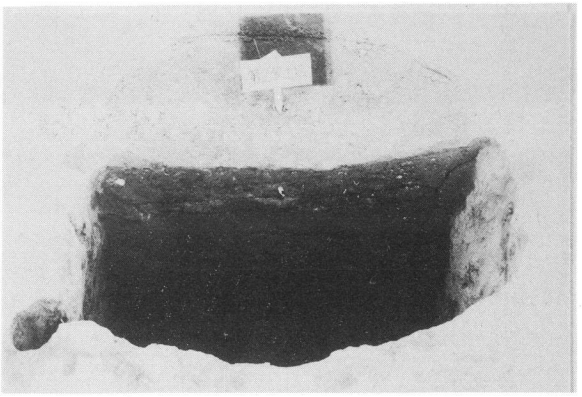
2．竪穴遺構1号

3．同上　天目茶碗出土状態

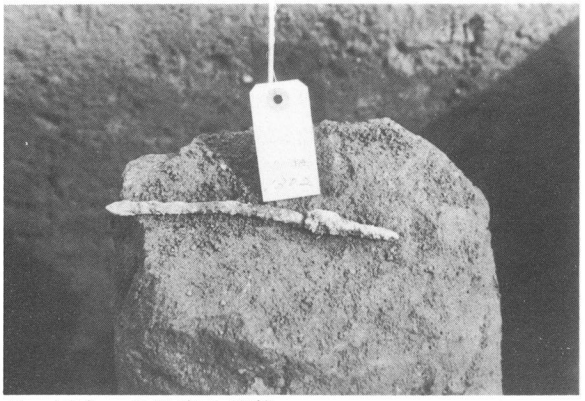


6．竪穴遺構2号

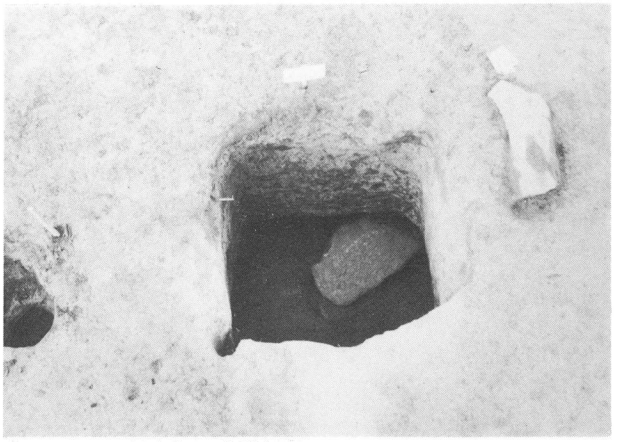
4．同上　四耳壺出土状態



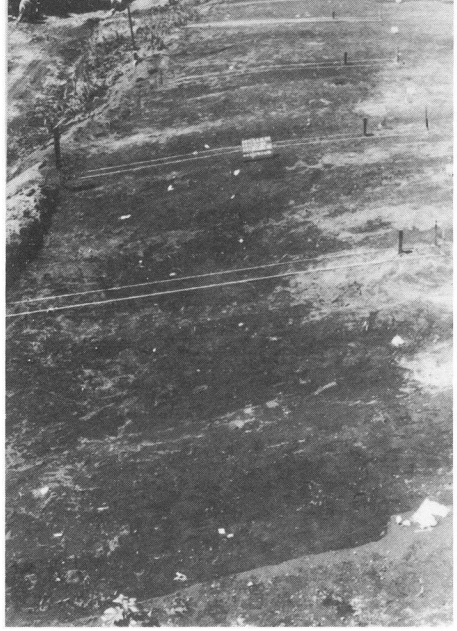
7．土壙2号断面



5．同上　鉄鏃出土状態



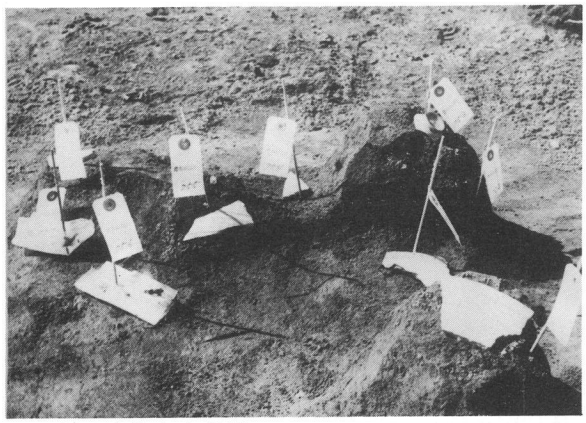
8．土壙2号(室状遺構)



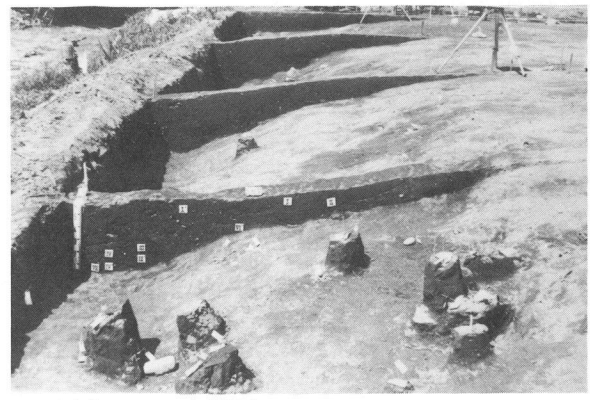
1．縦堀ベルト設定状態

2．縦堀全景(東より)

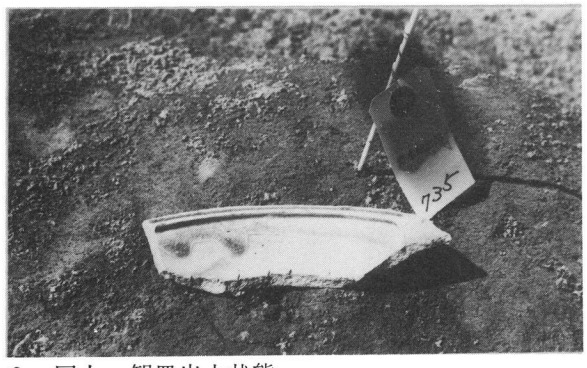
3．縦堀ベルト断面



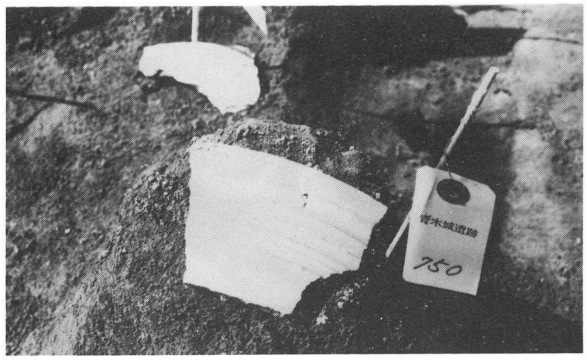
5．縦堀遺物出土状態



4．同上　ベルト断面



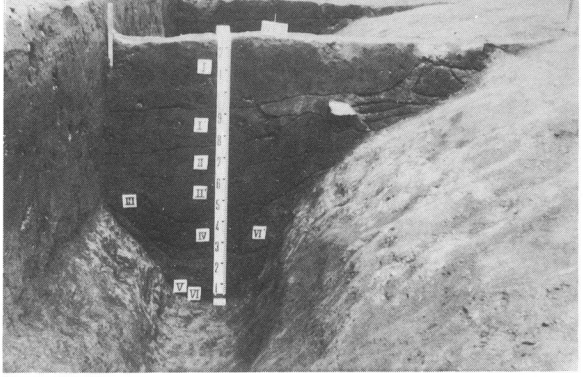
6．同上　卸皿出土状態



7．同上　折縁深皿出土状態

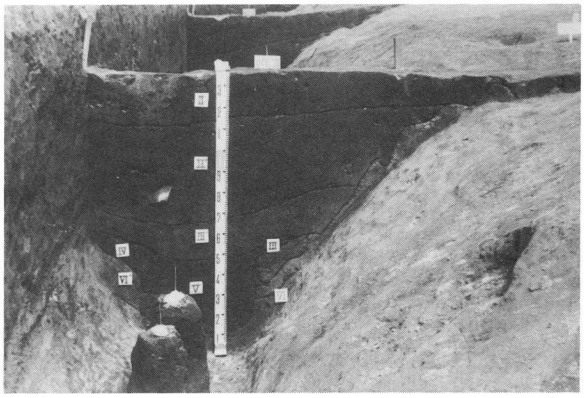
8．同上　平碗出土状態

1．横堀　掘り下げ状態

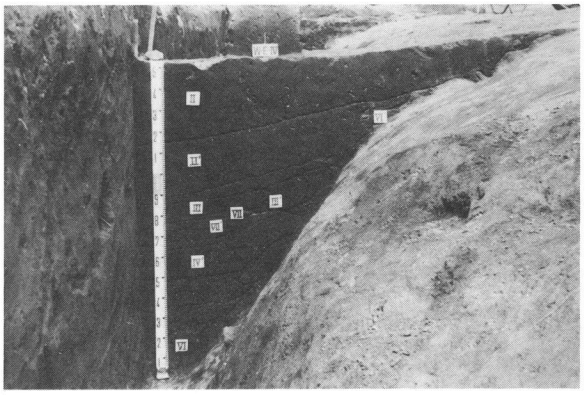


3．横堀　W—E IIベルト断面

2．同上　遺物出土状態

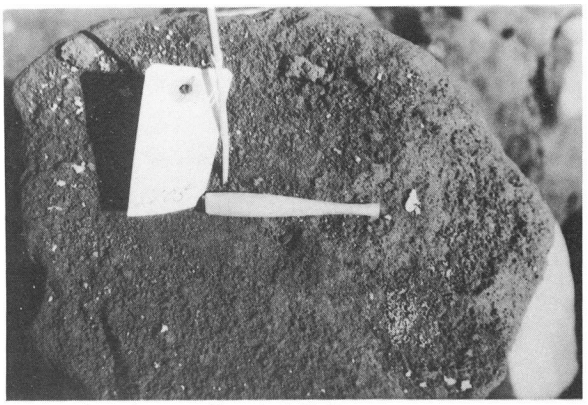


4．同上　W—EIIIベルト断面

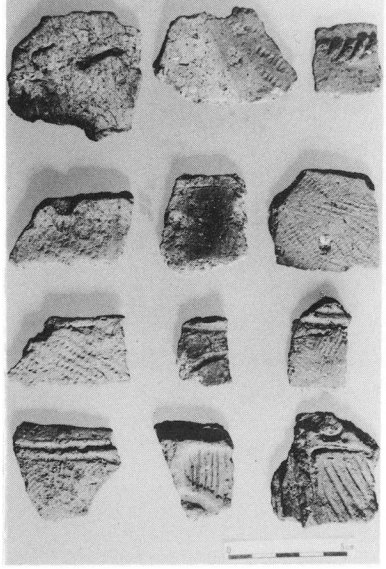


5．同上　W—EIVベルト断面

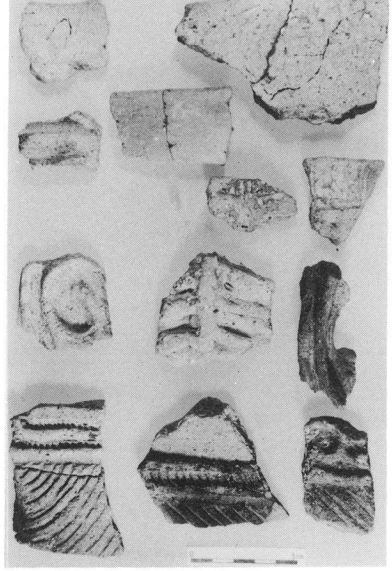
6．横堀全景(南より)



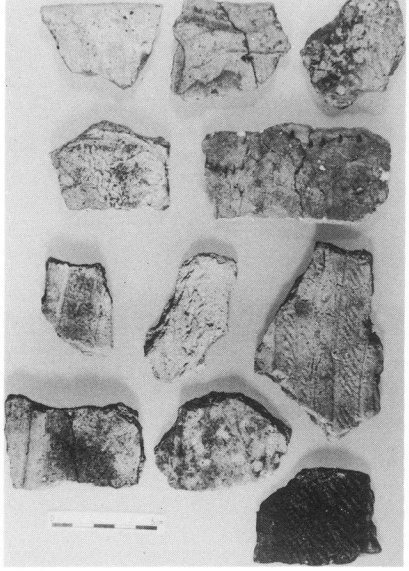
7．同左　きせる吸口出土状態



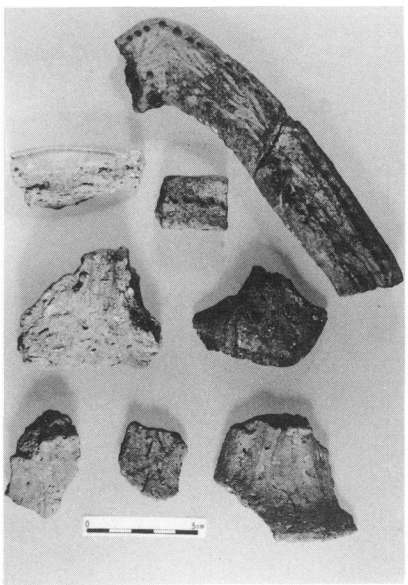
1．出土縄文土器



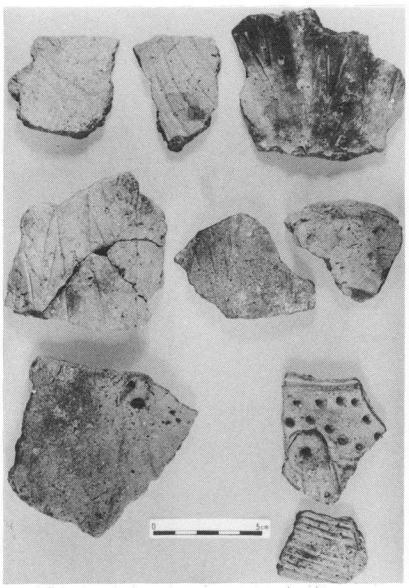
2．同左　（縄文中期後半）



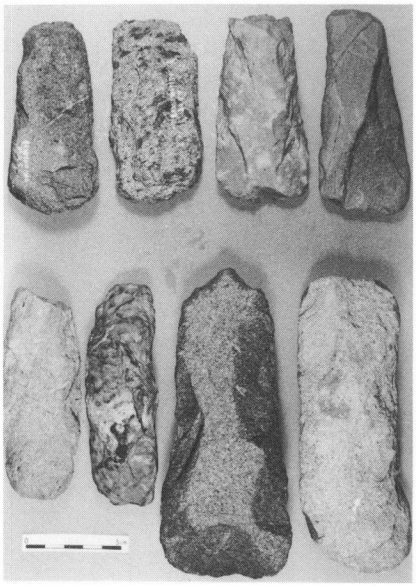
3．同左　（縄文中期後半）



4．出土縄文土器〈釣手、台付土器〉（縄文中期後半）

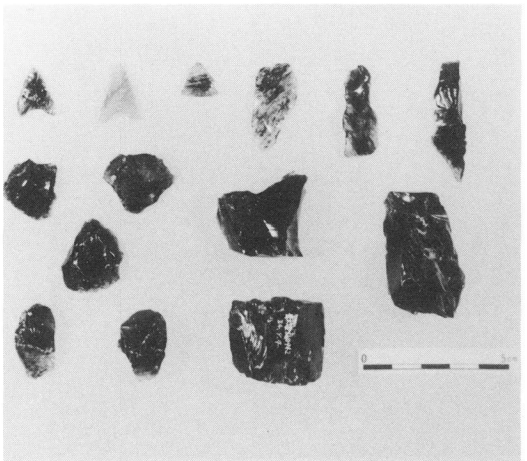


5．出土縄文土器（縄文中期末～後期初、下段右下のみ晩期）

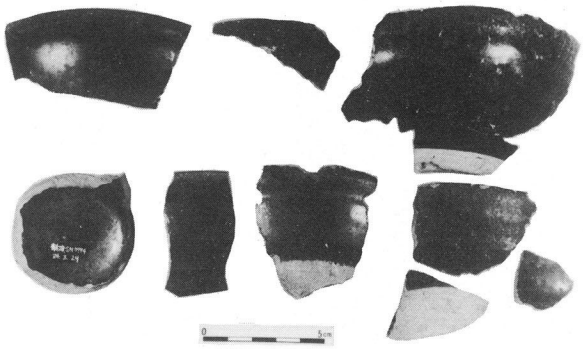


6．打製石斧

7．出土石器(右2点磨製石斧)



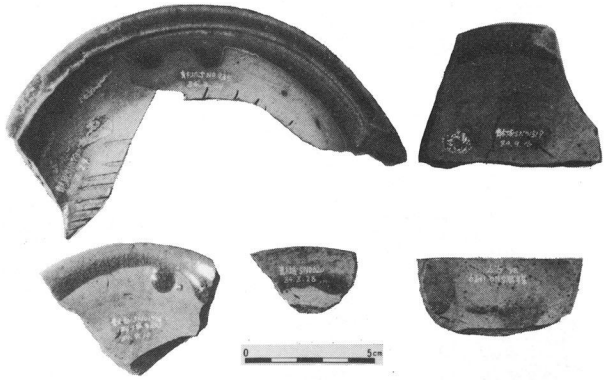
8．出土石器（石鏃、スクレイパー、ピエスエスキーユ、石核、外）



1．天目茶碗(15C)

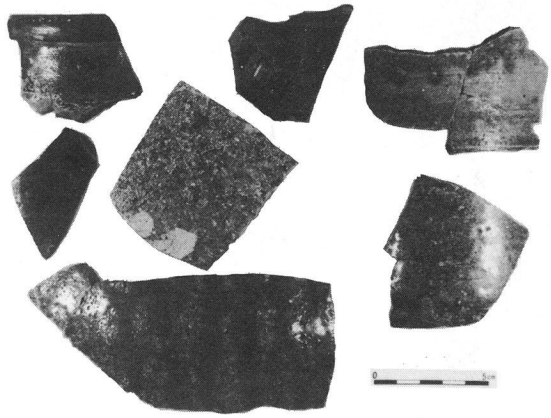
2．天目茶碗、稜皿、印花文皿(16C)

3．折縁深皿(15C)

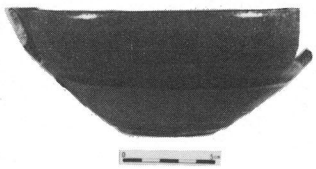


4．卸皿、縁釉小皿(15C)

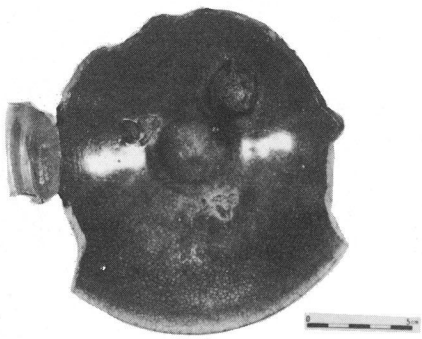
5．灰釉四耳壺(15C)



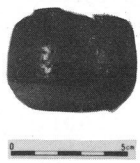
6．鉄釉・灰釉壺、瓶類(16C)



7．灰釉平碗(15C,側面)

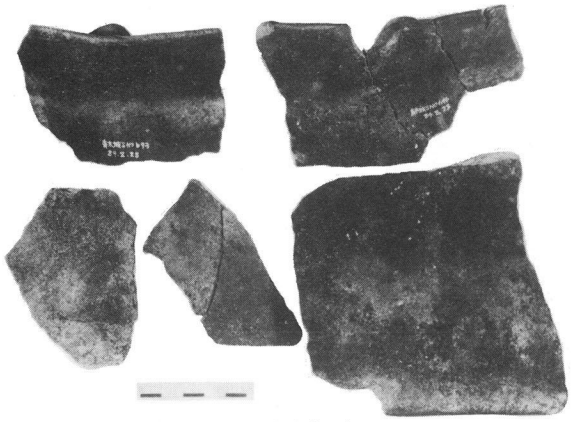


8．同左(内面)



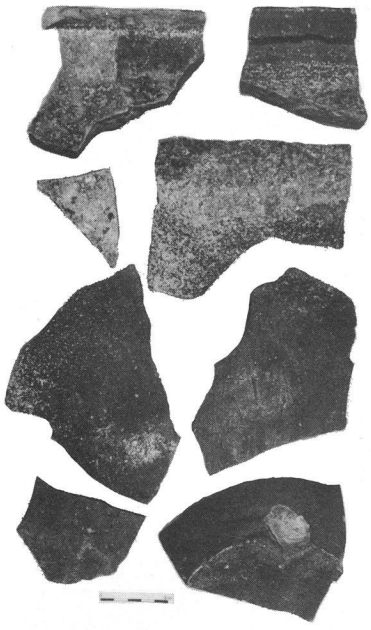
9．鉄釉茶入(16C)

図版10

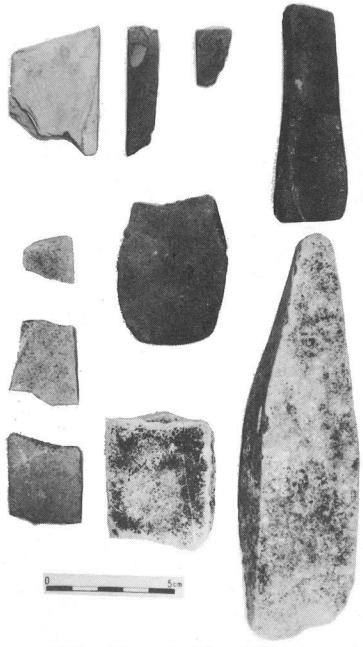


1．内耳土器(掘立柱平地住居跡)

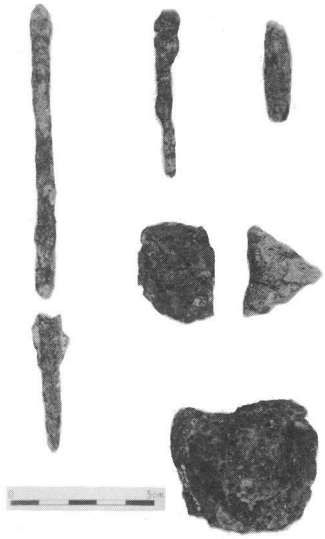
2．内耳土器(同左)



3．常滑大甕



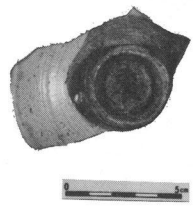
4．硯(上段中２点)・砥石



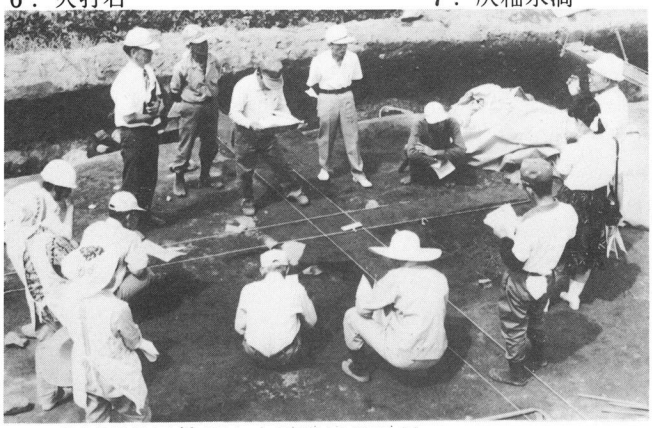
5．鉄鏃、鑿(のみ)、鉄滓、外

6．火打石

7．灰釉水滴



8．墨書陶器皿



9．東伊那公民館郷土史講座見学風景

10．発掘参加スタッフ

青木城遺跡

緊急発掘調査報告

昭和60年3月20日　印刷
昭和60年3月25日　発行

編　集　駒ケ根市上穂南2番15号市立駒ケ根博物館内
駒ケ根市埋蔵文化財発掘調査会
（TEL）0265—83—2719

発　行　駒ケ根市赤須町20番1号
駒ケ根市教育委員会

印　刷　長野市中越293番地
ほおずき書籍株式会社